



南部拠点地区遺跡群No.11

前橋市南部拠点西地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014. 9

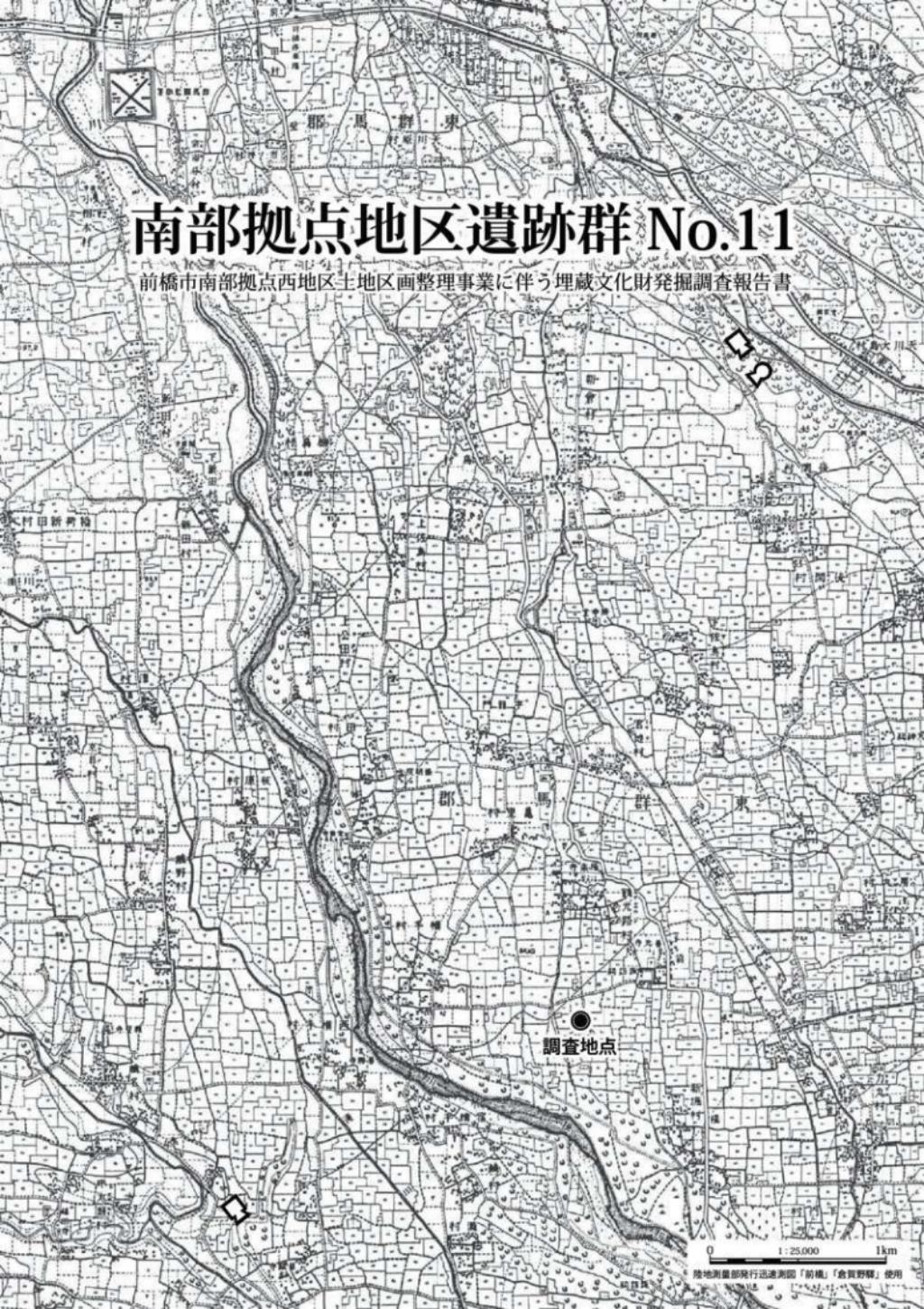
前橋市教育委員会

前橋市南部拠点西地区土地区画整理事業組合

山下工業株式会社

南部拠点地区遺跡群 No.11

前橋市南部拠点西地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書





南部拠点地区遺跡群No.11 上空から望む前橋台地と赤城山

写真中央上寄りのマーキングは、国内屈指の規模を誇る前方後方墳の前橋八幡山古墳（古墳前期・全長130m）。
その東方には三角縁神獣鏡を含む豊富な副葬品の出土で著名な前方後円墳、前橋天神山古墳（古墳前期・全長129m）があった。



水田の下から現れた古墳時代前期の集落

周溝を巡らす特徴的な住居跡が連鎖的に連なる。地下水位の高い前橋台地周辺では幾つかの類例が知られる。降雨後に撮影。
同時期の前方後方墳である元島名将軍塚古墳（全長95m）は、本遺跡の西方2.4kmと思われるほどの近い。写真左上付近に相当。

口絵



調査区の基本層序（中央調査区北壁東端近く）

上からAs-BとHr-FAの一次堆積層。右下の黒色土はAs-C下の旧流跡覆土。



Fig.2-2

吹きこぼれ痕と思われる
滴状のシミ



古墳時代前期の台付甕に遭る使用痕

井戸 D-1015 底面から出土。地下水によって表面が良好に保存されていた。



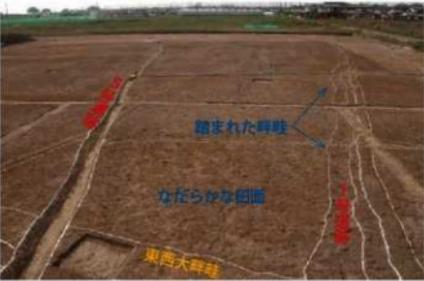
古墳時代前期の建物跡群（南西上方から）

互いに連鎖的な配置だが、角地からは3単位を見込める。上方はNo.10 遺跡の建物跡。



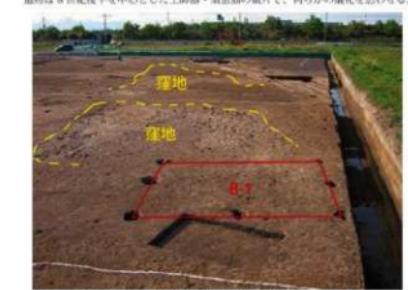
Hr-FA直下から検出された水田跡（南から）

旧流跡由来の谷に當れる。水田区画は一辻2m程度で、
小さく圃場としてはやや大きめの小圃。



古代末水田跡と1号道路（北から）

なだらかな田面と、右が跡を踏みつぶして残る1号道路、左は道供の5号道路。



中世の掘立柱建物B-1と窪地の関係（南から）

建物の北側には、馬蹄痕と起耕跡の削られた窪地（耕水跡で埋没）が並列。



中世末と推定される無数の馬蹄痕

自然現象の堆高地を覆う耕水跡直下から検出。一定期間放牧されていたことを想起させる。

例 言

- 本書は、前橋市南部拠点西地区土地区画整理事業（店舗建設）に伴う南部拠点地区遺跡群No.11の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 発掘調査は、前橋市南部拠点西地区土地区画整理組合の委託を受け、前橋市教育委員会文化財保護課の指導のもと山下工業株式会社（代表取締役 山下尚）が実施した。
- 発掘調査から報告書刊行までの作業は、前橋市南部拠点西地区土地区画整理組合の費用負担で実施した。
- 発掘調査の要項は次のとおりである。

遺跡所在地 群馬県前橋市亀里町 953-2, 953-3, 954-2, 955-2, 955-6, 957-5, 958-2, 958-5
遺跡コード 25G85 計画調査面積 8,400m²

計画期間【現地調査】平成26年3月10日～同5月23日 【整理】平成26年5月24日～同9月12日
調査担当者 青木利文（山下工業株式会社） 調査員 永井智教（山下工業株式会社）

- 遺構写真是青木・永井・大谷正芳（山下工業株式会社）が撮影、遺構図作成は田中隆明（タナカ設計）、遺物写真撮影と本書の挿図・図版作成と編集は山際哲章と永井が行った。
- 整理作業は永井を中心に堀地文子・大島郁美・山口八代江・樺沢礼子（山下工業株式会社）が行った。
また、遺物実測及びトレースは永井が行った。
- 本書の執筆はIが藤坂和延（前橋市教育委員会）、その他は永井である。
- 発掘調査資料及び出土遺物は、一括して前橋市教育委員会が保管している。
- 調査及び報告書の作成にあたっては、下記の機関・諸氏からご助言・ご協力を賜った。（五十音順・敬称略）
前橋市南部拠点西地区土地区画整理組合（有）毛野考古学研究所

赤塚次郎 有山洋代 池田敏宏 出浦崇 石井智大 井上太 笠原仁史 小此木真理 川又隆一郎
川田馨秋 小坂延仁 小林朋恵 坂口一 坂田敏行 篠田泰輔 内藤亮 長井正欣 中川二美
中村岳彦 中隆之 原京子 日沖剛史 三浦京子 水谷貴之 南田法正 宮本久子 山本千春
山本良太 横沢真一

凡 例

- 表紙に2006年国土地理院撮影の空中写真を収録・加工し使用した。
- 遺跡、全体図におけるX・Y値は、平面直角座標IX系（世界測地系）の座標値、挿図中の北は座標北である。
- 挿図中で用いる遺構等の略称は以下のとおりである。
【周溝状遺構】・・C 【溝跡】・・W 【土坑】・・D
【ピット】・・P 【落ち込み】・・O
- 遺構略称については出土遺物の注記等との整合性を考慮して、煩雑だが調査時の名称をそのまま用いている。
なお、遺構略称の付番方法は以下の通りである。

1 面目・土坑 D-1 ~ / 溝 W-1 ~
2 面目・土坑 D-1001 ~ / 溝 W-101 ~

- 遺構図は紙面に合わせて1/600・1/300・1/250・1/200・1/100・1/60・1/40を適宜使い分けた。
- 遺物実測図は土器が1/3、石製品は1/6である。
- 遺構図・遺物図の網掛けは、図中に凡例を明示した。

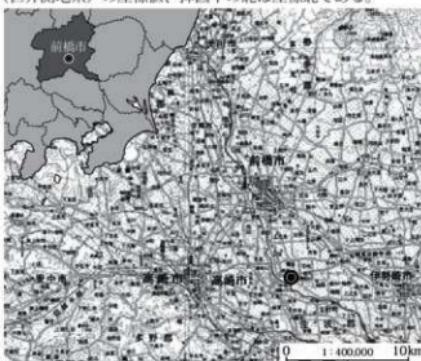


Fig. 1 遺跡の位置

目 次

口 紋

例言・凡例

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の地理的・歴史的環境	1
1. 地理的環境	
2. 歴史的環境	
III 調査経過と方法	4
IV 基本層序	4
V 検出された遺構と遺物	5
1. 調査区概観	
2. 古墳時代前期の遺構と遺物	
3. 古墳時代後期の遺構と遺物	
4. 奈良・平安時代の遺構と遺物	
5. 平安時代末の遺構	
6. 中・近世の遺構	
VI 総括	39
1. 古墳時代前期の遺構群について	
2. 奈良・平安時代の遺構と遺物について	
3. その他の時期の遺構と遺物について	

写真図版

報告書抄録



Fig. 2 南部拠点地区遺跡群 No.11 と周辺遺跡の調査区 (As-B 下水田・図中方眼は推定条里型地割)

I 調査に至る経緯

平成 25 年 6 月 5 日付けて前橋市南部拠点西地区土地区画整理組合より埋蔵文化財確認調査依頼が前橋市教育委員会に提出され、同年 7 月 3 日～8 月 30 日にかけて試掘調査を実施。浅間 B 軽石で覆われた水田跡を確認した。試掘調査に際しては、開発面積が広大であるため原則 20 m ピッチでトレーンチを設定し、重機により遺構確認を行なった。なお、試掘面積は 8,659m² であった。試掘調査の結果を受け、埋蔵文化財の保護について協議を重ねたが、設計変更是不可能であるため発掘調査を実施し記録保存の措置を執ることで合意を得た。前橋市教育委員会では既に直営による発掘調査を実施しており、直営による調査の実施が困難であるため、「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要綱」に則り、前橋市教育委員会の作成する調査仕様書に基づく監理・指導の下、発掘調査を実施することになり、平成 26 年 3 月 7 日付けて前橋市南部拠点西地区土地区画整理組合、民間調査組織である山下工業株式会社、前橋市教育委員会との間で発掘調査実施に関する協定書が締結された。なお、遺跡名称「南部拠点地区遺跡群 No.11」の「南部拠点地区」は区画整理事業名を採用し、数字の「No.11」は過年度に実施した調査と区別するために付したものである。

II 遺跡の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

南部拠点地区遺跡群 No.11 は、JR 前橋駅から南南東に約 6 km に位置する。遺跡周辺は近年急速に都市化しているが、周囲には今なお水田地帯が広がり、昭和 40 年代の土地改良以前は条里を彷彿とさせる地割が顕著であった。

本遺跡は標高約 78m の一見平坦な沖積低地に立地する。地形上は前橋台地に相当し、約 2 万年前の浅間山火山活動でもたらされた前橋泥流が生成した地形である。台地は概ね北西～南東方向へ緩く下り、傾斜に沿った中小河川による沖積地化が顕著である。利根川は中世まで台地北東縁を洗っていたが、近世初頭以降は台地を分断する現行の流れとなった。現在、台地上では埋没路や後背湿地を中心に水田が展開し、自然堤防等の微高地に集落が占地している。台地上には東から藤川・端氣川・西川が平行し、傾斜に直行して南東へ流下する。中でも規模の大きい端氣川は、前橋市南部の農耕地帯を伝統的に潤してきた主要な幹線用水路であった。

2. 歴史的環境

前橋台地最古の遺跡は绳文時代草創期まで遡るが、本格的な定住は古墳時代前期以降である。本遺跡もやはり当該期の遺構群から始まることから、本節では古墳時代以降の前橋台地周辺の遺跡を概観しておきたい。

古墳時代前期 開発第 1 期と言える時期である。しかし高崎台地井野川流域のような As-C テフラ下の水田等遺構は知られておらず、前橋台地の本格的な開発は一段階遅れた前期中段階からである。中でも台地北東縁の山王若宮遺跡は古く、東海西部以外に畿内や北陸の影響が強い土器を出土する。前期中段階から新段階の遺跡は多く、横手湯田・横手早稲田・公田池尻・公田東・鶴島川端・六供下堂木・西善尺司・徳丸仲田・東上之宮・下之宮高保・高崎情報団地遺跡等を代表に、小規模な遺跡は枚挙に暇がない。多くは堅穴建物からなるが、周溝を巡らす建物や井戸跡も多く確認され、地域的特色と言えるのかも知れない。他に徳丸仲田・砂町遺跡では自然流路を再掘削した大溝が確認されている。砂町遺跡ではこの溝から分水したかのような小規模な溝が錯綜しており、積極的な耕地拡大が何われる。しかし肝心の水田自体は有効なテフラを欠くために不明瞭で、今後の調査における課題となろう。

前期の墳墓は、周溝墓と高塚古墳の双方が知られている。周溝墓は西善尺司・公田東・下郷・宇貴・鈴の宮・下滝梅崎遺跡にあり、方形が主体だが公田東・下郷・鈴の宮遺跡では前方後方形もある。高塚古墳としては前橋八幡山・元島名將軍塚古墳等の前方後方墳、前橋天神山・下郷天神塚・川合稻荷山古墳等の前方後円墳、朝倉 2 号墳・柴崎沢古墳等の円墳がある。周溝墓から古墳、前方後方墳から前方後円墳、方から円へという変遷で理解される。

古墳時代中期 集落については、横手湯田・横手早稲田・朝倉工業団地・公田池尻・六供・高崎情報団地遺跡等

で前期から継続して確認されるが、該期に統かない遺跡も多く、遺跡数は少ない。墳墓については、比較的大規模な前方後円墳として井野川右岸の不動山・岩鼻二子山古墳があるが、前橋台地では確実な例が今のところ無い。とは言え朝倉・広瀬古墳群中の阿弥陀山古墳は葺石と埴輪壺を巡らす大形円墳で、セカンダリーな首長墓に相応しい。茂木古墳群中の鶴配山古墳と梨ノ木山古墳も該期の円墳で、前者は銅鏡をもつ前期タイプ、後者は張り出し部が推定されている。朝倉・広瀬古墳群中の亀塚山古墳も推定中期末頃の帆立貝式古墳で、阿弥陀山古墳に続くのかも知れない。

古墳時代後期 中期末からの連続性が強いものの、該期初頭は開発第Ⅱ期と言える時期である。具体的には6世紀初頭頃の榛名山ニツ岳形成期テフラ(Hr-Fa)直下から検出される小区画水田で、台地上の後背湿地部分では普遍的に検出される。一方で集落は、前期・中期のそれが発展的に続く高崎情報団地・公田池尻・六供遺跡群や、標高が高く乾燥した総社地区に集約されるようで、今後の精査次第では集落域と生産域が分離される可能性がある。なお、横手湯田・横手早稲田遺跡では遺構こそ無いが遺物は出土しており、水田經營に係る施設も想定される。また「女溝」と言われる2本の大溝も、利根川から台地上へ引水する為に該期に開闢されたと推定されている。墳墓については、後期前半の王山古墳が初期横穴式石室をもつ前方後円墳で、北西の総社古墳群中の遠見山古墳(前方後円墳)に続くとの説もある。前後する時期には、高崎情報団地遺跡や広瀬古墳群中の一部で初期群集墳の形成が開始される。後期の後半には井野川右岸の綿貫觀音山古墳や、朝倉・広瀬古墳群中の前橋二子山・不二山・金冠塚古墳、茂木古墳群中のオトカ塚古墳、単独的な上川瀬3号墳等の前方後円墳が多数築造される。また、稻荷町・箱石・小泉・川合・角淵・若宮八幡原古墳群等では円墳が盛んに築造されており、地域社会の変革を想定できるが、集落の動態と今一つリンクしない点は注意される。あるいは後期前半の開発による蓄積が遺墓へ向かわせたとも思える。

古墳時代末～飛鳥・白鳳期 集落については、公田池尻・朝倉工業団地遺跡のように古墳後期から続く遺跡も多いが、朝倉伊勢西遺跡における新たな集落の形成は、端気川が轟鳥・後閑用水を分ける場所に近いことを考慮すると興味深い。ほど近い広瀬木ノ宮遺跡では、古墳群中の空白地から堀に囲まれる倉庫跡が検出されており、報告者も推定する居館的性格なのか、あるいは律令的な施設なのかは意見の分かれどころであろう。墳墓については地図外の為に詳述はしないが、総社古墳群中に総社愛宕山・宝塔山・蛇穴山古墳といった大形方墳が縦起的に築造され、東日本有数の白鳳寺院である王山庵寺へと繋がるとされる。古代官道の「東山道」設置も該期である。

奈良・平安時代 集落は公田東・公田池尻・六供・朝倉工業団地・朝倉伊勢西・西善尺司遺跡に加え、やや遅れて西田・一万田・神人原II・上之手石塚・福島曲戸遺跡等が成立する。一万田遺跡では柵列・上之手石塚遺跡等では掘立柱建物群が確認されており、公的な施設の可能性もある。なお、該期の前橋台地は概ね西半が群馬郡、東半が那波郡であった。朝倉伊勢西遺跡周辺を那波郡朝倉郷とするならば、郡境は端気川付近に想定される。また、台地北西の総社地区には国府・国分寺が設置されており、上野国の中核部に隣接する地域であったことは注意されよう。

該期の前橋台地の特徴として、条里型水田の広域施工がある。從来は西田遺跡の9世紀後半の竪穴建物と水田の重複関係を根拠に、施工時期は9世紀後半以降との説が支配的であったが、砂町遺跡の大畦群から出土した土器を根拠に8世紀後半と考える向きもある。あるいは西田遺跡などは、条里型水田の施工に關係する遺跡とも推定されようか。該期末の天仁元年には浅間山噴火の火山灰(As-B)を被災し、これに埋もれた水田跡が広く確認されている。

Tab. 1 周辺の遺跡・古墳群・古墳一覧

遺跡名	古墳・古跡性質	参考文献	遺跡名	古墳・古跡性質	参考文献	遺跡名	古墳・古跡性質	参考文献
1. 朝倉城	城郭・平城・空堀	19. 三井畠・古墳群	38. 下原遺跡・古墳群・古跡	B. 丁字路・古跡	49. 三井畠遺跡・古墳群・古跡	C. 五郎原・古跡	50. 三井畠遺跡・古墳群・古跡	D. 大谷原・古跡
2. 朝倉城址	城郭・空堀	20. 芝原・古跡	39. 神明遺跡・古跡	C. 五郎原・古跡	51. 大谷原・古跡	E. 大谷原・古跡	52. 五郎原・古跡	F. 大谷原・古跡
3. 朝倉城址	城郭・空堀	21. 三井畠遺跡・古墳群	40. 神明遺跡・古墳群・古跡	D. 二之丸原・古跡	53. 五郎原・古跡	G. 五郎原・古跡	54. 五郎原・古跡	H. 五郎原・古跡
4. 朝倉城址	城郭・空堀	22. 三井畠遺跡・古墳群・古跡	41. 神明遺跡・古墳群・古跡	I. 二之丸原・古跡	55. 五郎原・古跡	J. 五郎原・古跡	56. 五郎原・古跡	K. 五郎原・古跡
5. 朝倉城址	城郭・空堀	23. 三井畠遺跡・古跡	42. 五郎原・古跡	L. 五郎原・古跡	M. 五郎原・古跡	N. 五郎原・古跡	O. 五郎原・古跡	P. 五郎原・古跡
6. 朝倉城址	城郭・空堀	24. 西田遺跡・古跡	43. 五郎原・古跡	Q. 五郎原・古跡	R. 五郎原・古跡	S. 五郎原・古跡	T. 五郎原・古跡	U. 五郎原・古跡
7. 朝倉城址	城郭・空堀	25. 稲荷町遺跡・古跡	44. 中郷遺跡・古跡	V. 五郎原・古跡	W. 五郎原・古跡	X. 五郎原・古跡	Y. 五郎原・古跡	Z. 五郎原・古跡
8. 朝倉城址	城郭・空堀	26. 稲荷町遺跡・古跡	45. 高崎遺跡・古跡	A. 小谷原・古跡	B. 小谷原・古跡	C. 小谷原・古跡	D. 小谷原・古跡	E. 小谷原・古跡
9. 朝倉城址	城郭・空堀	27. 田代遺跡・古跡	46. 五郎原・古跡	F. 五郎原・古跡	G. 五郎原・古跡	H. 五郎原・古跡	I. 五郎原・古跡	J. 五郎原・古跡
10. 朝倉城址	城郭・空堀	28. 田代遺跡・古跡	47. 五郎原・古跡	K. 五郎原・古跡	L. 五郎原・古跡	M. 五郎原・古跡	N. 五郎原・古跡	O. 五郎原・古跡
11. 朝倉城址	城郭・空堀	29. 田代遺跡・古跡	48. 五郎原・古跡	P. 五郎原・古跡	Q. 五郎原・古跡	R. 五郎原・古跡	S. 五郎原・古跡	T. 五郎原・古跡
12. 朝倉城址	城郭・空堀	30. 田代遺跡・古跡	49. 五郎原・古跡	U. 五郎原・古跡	V. 五郎原・古跡	W. 五郎原・古跡	X. 五郎原・古跡	Y. 五郎原・古跡
13. 田代町	古跡	31. 田代遺跡・古跡	50. 五郎原・古跡	Z. 五郎原・古跡	A. 五郎原・古跡	B. 五郎原・古跡	C. 五郎原・古跡	D. 五郎原・古跡
14. 鶴配山	古跡	32. 鶴配山遺跡・古跡	51. 五郎原・古跡	E. 五郎原・古跡	F. 五郎原・古跡	G. 五郎原・古跡	H. 五郎原・古跡	I. 五郎原・古跡
15. 鶴配山	古跡	33. 鶴配山遺跡・古跡	52. 五郎原・古跡	J. 五郎原・古跡	K. 五郎原・古跡	L. 五郎原・古跡	M. 五郎原・古跡	N. 五郎原・古跡
16. 鶴配山	古跡	34. 上原山遺跡・古跡	53. 五郎原・古跡	Q. 五郎原・古跡	R. 五郎原・古跡	S. 五郎原・古跡	T. 五郎原・古跡	U. 五郎原・古跡
17. 鶴配山	古跡	35. 上原山遺跡・古跡	54. 五郎原・古跡	V. 五郎原・古跡	W. 五郎原・古跡	X. 五郎原・古跡	Y. 五郎原・古跡	Z. 五郎原・古跡
18. 鶴配山	古跡	36. 上原山遺跡・古跡	55. 五郎原・古跡	A. 五郎原・古跡	B. 五郎原・古跡	C. 五郎原・古跡	D. 五郎原・古跡	E. 五郎原・古跡
19. 鶴配山	古跡	37. 上原山遺跡・古跡	56. 五郎原・古跡	F. 五郎原・古跡	G. 五郎原・古跡	H. 五郎原・古跡	I. 五郎原・古跡	J. 五郎原・古跡

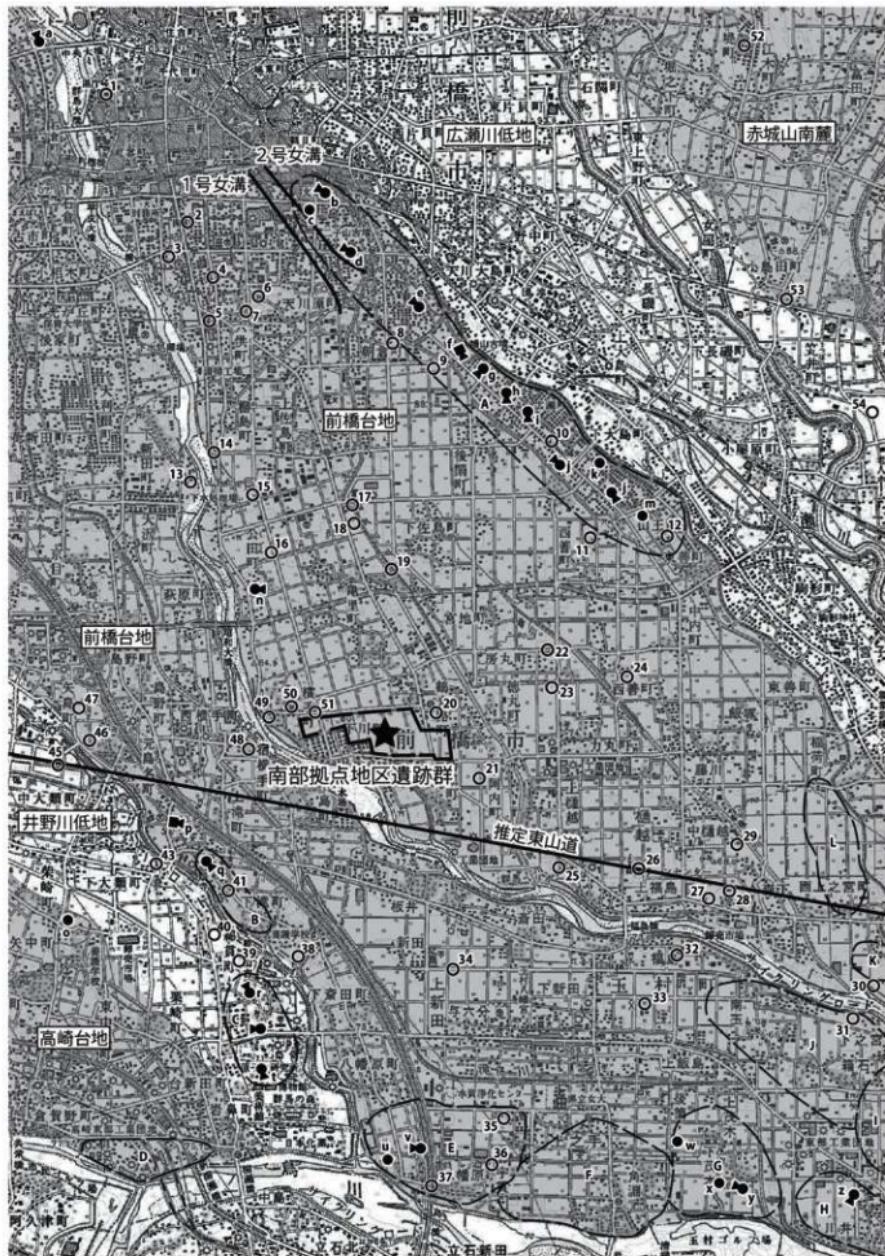


Fig. 3 周辺の遺跡 (古墳時代～古代) 1/50,000

直下の水田は思いのほか風化している場合も多く、古代末において耕作放棄が進行していたことを教えてくれる。

中・近世 As-B 被災の後、多くの水田は直ちに復旧されることなく放置されるが、おそらく中世後半頃には火山灰下の地割がある程度踏襲した水田が拓かれる。台地上に今も遺る環濠屋敷群は、開発の拠点として中世に成立したようである。しかし台地上は洪水の被害も度々で、中世後半～近世初頭には利根川転流へと至り地形を大きく変えた。近世後半の天明3年浅間山噴火の際には、火山灰と共に利根川沿いでは泥流の被害もあった。

III 調査経過と方法

調査の経過 今回の調査は建物建設に先立つもので、総調査面積は 11,522m² に及ぶ。確認調査結果にもとづく前橋市教育委員会（以下市教委）作成の仕様書では、As-B 直下面（1面目）の水田遺構の検出と部分的な古墳時代包含層調査であったが、調査の過程で包含層が遺構に伴うと判断できた為、1面目の約 30% を 2 面目として調査した。実際には平成 26 年 4 月 2 日からバックホウとクローラーダンプによる表土掘削に入り、同月 4 日からは重機掘削を追いかけて作業員による精査開始、同月 26 日まで続けた。1面目の掘りあがった 5 月 1 日には市教委担当者による 1 回目の完了確認が行われ、翌 2 日にはラジコンヘリによる空撮を行った。5 月 3 日からは再び重機を入れて 2 面目までの掘削を行い、同月 13 日から作業員による遺構掘削を開始、完掘後の測量を終えた 5 月 23 日には 2 回目の完了確認を受けた。諸事情により期間・予算の面で苦戦を強いられた調査であったが、市教委担当者と協議した上で調査水準を調整し、徹底した効率化と臨機応変な対応で臨み、記録保存を果たすことができた。

発掘調査の方法 1面目の表土除去と 2面目への掘削には、当社が土木業という利点を最大限活かし可能な限りバックホウを用いた。しかし 1面目火山灰直下の精査と 2面目の遺構掘削には、鋤籠・スコップを併用しつつも移植ゴテの使用を貫徹した。出土遺物については、必要と判断された場合のみ点上げとし、基本的には遺構・層序単位での一括取り上げとした。遺構平面図は光波測距儀による電子平板で逐一作図し、隨時紙出力した図面を現地で校正し、最終的に縮尺 1/40 で調整した。土層断面図は手実測とし、縮尺 1/20 で作成した。写真記録についてはアナログカメラ（35mmモノクロネガ・カラーボジ）とデジタルカメラを併用している。調査区全景は、1面目完了時にラジコンヘリコプター、2面目は調査完了時に高所作業車を手配し、複数アングルから調査員が撮影している。

IV 基本層序

調査区はその高さに微妙な差があり、旧河道由来の谷地とそれに沿った貧弱な自然堤防、後背湿地部分に跨っていると判断される（Fig. 4 右）。これらは、各々異なる層序を示しており、ここでは 3 者を模式化した柱状図を示す。なお、後背湿地である A は自然な層序であるが、谷地の C ではあるべきはずのⅢ層が無かったり、微高地 B では他に見られないⅡ層が確認できたりと不可解な点がある。人為的な土の移動を想定したいところだが、As-B（VI層）より上位は調査対象外とした為、不明である。周辺遺跡での今後の調査に期待したい。

- I 層 灰褐色土 a 簕層耕作土、b 層畠耕作土上で As-A 多く含む。
- II 層 白色軽石粒 As-A 一次堆積層。
- III 層 淡茶褐色細砂土 推定中世末の洪水層。a は擾拌層、b は無擾拌。
- IV 層 灰褐色砂質土 As-B を多く含む。
- V 層 暗茶褐色砂質土 As-B を多量に含む。
- VI 层 暗灰色砂 As-B 一次堆積層。
- VII 层 黑褐色土 Hr-FA 含み、黒味の強い a と FA 多い b に細分。
- VIII 层 黄褐色細砂 Hr-FA 一次堆積層。洪水堆積か。
- IX 层 黑褐色土 As-C 混入土。
- X 层 As-C 一次堆積層。
- XI 层 淡灰褐色土 水成堆積のローム質土。
- XII 层 淡黑褐色土 バミス含む。
- XIII 层 灰白色粘土 碳多く含む。いわゆる前橋泥炭。

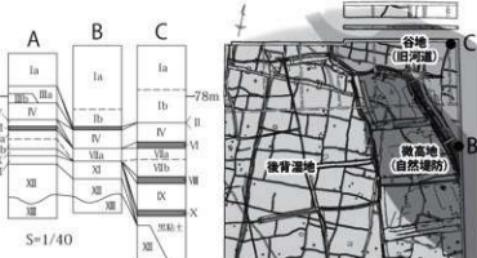


Fig. 4 基本層序模式図と調査区の微地形

V 検出された遺構と遺物

1. 調査区概観

調査区は建設予定建物敷の主体部分となる中央調査区と、付帯施設予定地の北・南調査区の大きく3地点だが、基本的には各々接しているので一連の調査区と考えて差し支えない。以下、各調査区の概略について触れる。

a. 中央調査区

建設予定建物敷の主体となる調査区で、約8,614m²である。As-B一次堆積層(VI層)ないしは相当層までを表土として除去して1面目の調査を行った後、30%程度を2面目として調査した。

(1面目の概略) As-Bが自然堤防状の微高地上を除いて一次堆積しており、その直下から平安時代末の条里型水田跡(坪交点含)と、水田・畦畔を踏みつけた道路が7条検出された。同時に中近世の遺構も調査している。

平安時代末の水田 畦で画されており、坪界相当の畔は太くしっかりした大畦畔と呼ぶべきものだが、坪内を分ける畔は細く、土圧の影響を勘案しても低い。水田面もなだらかに風化した雰囲気で、畔の低さもまたこれに起因するのかも知れない。取排水に伴う水路は不明で、かけ流しによる灌水であったと考えざるをえない。

平安時代末の道路 溝状の窪地として確認され、その方向は畦畔に規制されている部分もある。畦畔を踏みつけた状態もあり、耕作放棄からAs-B降下までの間に形成されたと考えられる。

中・近世の遺構 1面目で水田と共に調査し、溝跡19条・土坑162基・段切り遺構7箇所・掘立柱建物1棟を検出している。溝跡と段切り遺構の一部は土地改良前の地形図に確認できるので、機能的には近現代まで引き継がれていたようである。As-Bがほぼ確認されない微高地部分では、中世末～近世前半と推定される洪水層堆積層が確認された。As-B直下と同じように精査したところ、窪地状の凹み部分を中心に馬蹄痕を検出している。

(2面目の概略) 1面目終了後、古墳時代の土師器細片が集中する微高地と、Hr-FAの堆積が確認される谷地部分2,302m²を2面目として調査した。微高地部分ではXI層上面まで重機で注意深く掘削し、遺構確認を行った。谷地部分ではHr-FA一次堆積層(X層)の上面まで重機掘削した後、移植ゴテで精査した。

周溝をもつ建物跡 微高地部分では、古墳時代前期の周溝状遺構が9箇所検出された。これらは内側に竪穴建物のホリカタを思わせる遺構を伴う4号や、周辺遺跡における類例から、周溝をもつ竪穴建物跡と判断した。

土坑・溝・水田 土坑のうち深くしっかりした3基は、出土遺物等から古墳時代前期の井戸跡と判断した。また、底面が漏斗状を呈する古墳時代後期の土坑も3基あるが、性格については明らかでない。不定形なものは倒木や立ち枯れに関係する自然遺構で、倒木には古墳時代前期の遺物を出土する場合もあり形成時期の一端を示している。溝跡は古墳時代前期と奈良・平安時代がある。古墳前期のそれは周溝を巡らす建物跡を避けたり繋いだりしているので、集落内の排水に関係すると推察されるが、周溝と重複関係もあるので一時的な施設のようである。奈良・平安時代の溝跡は、平安末水田の大畦畔下から検出されたもので、条里型地割に則った遺構である。流水の痕跡はないので水路ではなく区画溝と考えられるが、複数回の掘り直しを認める場所もあり、区画の重要性を窺わせる。坪界交点付近からは土師器・須恵器の环・鉢・甌の破片がまとまって出土し、水田に関する何らかの儀礼がここで行われていたことを教えてくれる。他に奈良時代後半の溜井と推定した土坑もあり、灌漑方法を考える上で興味深い。これらの遺構・遺物は、本地域における条里型水田の施工時期を検討する上で、今後重要な位置づけを得てゆくものと期待される。また、Hr-FA下からは、古墳時代前期の良好な水田跡を検出した。南方の微高地上には土器を伴う土坑もあり、該期の農業経営を考える上で興味深いものである。

層序の把握方法 中央調査区では、表土除去時に機械バケット幅で前橋泥流(灘層)まで、パイロット的に掘削したトレッチを活用して層序を把握した。先行して基本層序が把握でき、排水溝や散水用の水溜めとしても重宝であった。反面、ある程度遺構が損傷することは覚悟せねばならない。ちなみにこのトレッチで把握し切れない場合は、最終段階で任意のサブトレッチを人力で掘削して観察に努めた。

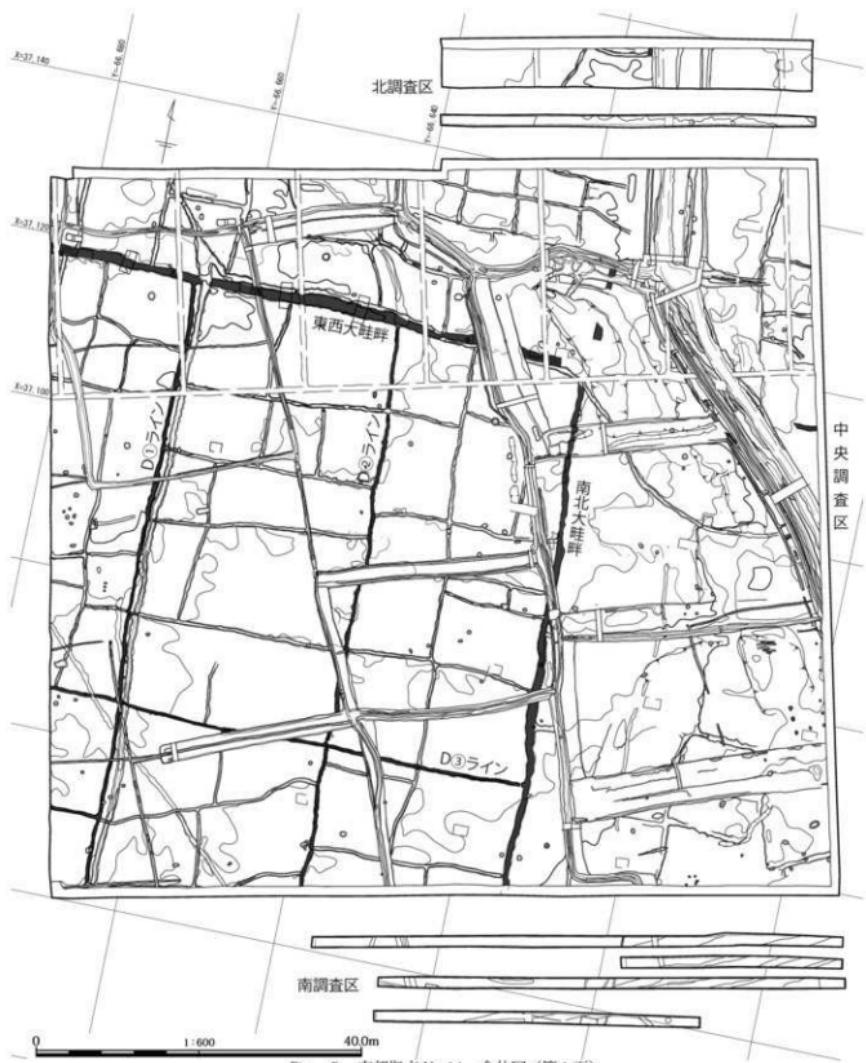


Fig. 5 南部拠点 No.11 全体図（第1面）

b. 北調査区

建設予定建物が北に張り出す部分については、市教委との協議にもとづきトレンチ調査対応とした。具体的には重機バケット幅×46 m長でHr-FA直下面の状況把握を意図した北1トレンチと、6 m幅×46 m長でAs-B直下面を精査した北2トレンチの計2本である。北1トレンチではHr-FA直下の水田跡を、北2トレンチでは中央調査区から続くAs-B直下の平安時代末の水田跡を検出し、水田面の畦畔寄りからは標石が確認された。



Fig. 6 南部拠点 No.11 全体図（第2面）

c. 南調査区

建設予定建物が南へ張り出す部分で、北調査区同様トレンチ調査とした。4本平行にAs-B上面まで掘削し、人力で精査した。中央調査区から続く溝跡や土坑以外に、東西方向に平行する溝跡群を確認した。溝跡覆土には水流を示す細砂層があり、中央調査区から続く12号溝跡(近世)との重複関係から、中世後半から近現代まで繰り返し掘り返され使用された水路跡と考えられる。なお、土地改良前の地形図には地割として確認できる。

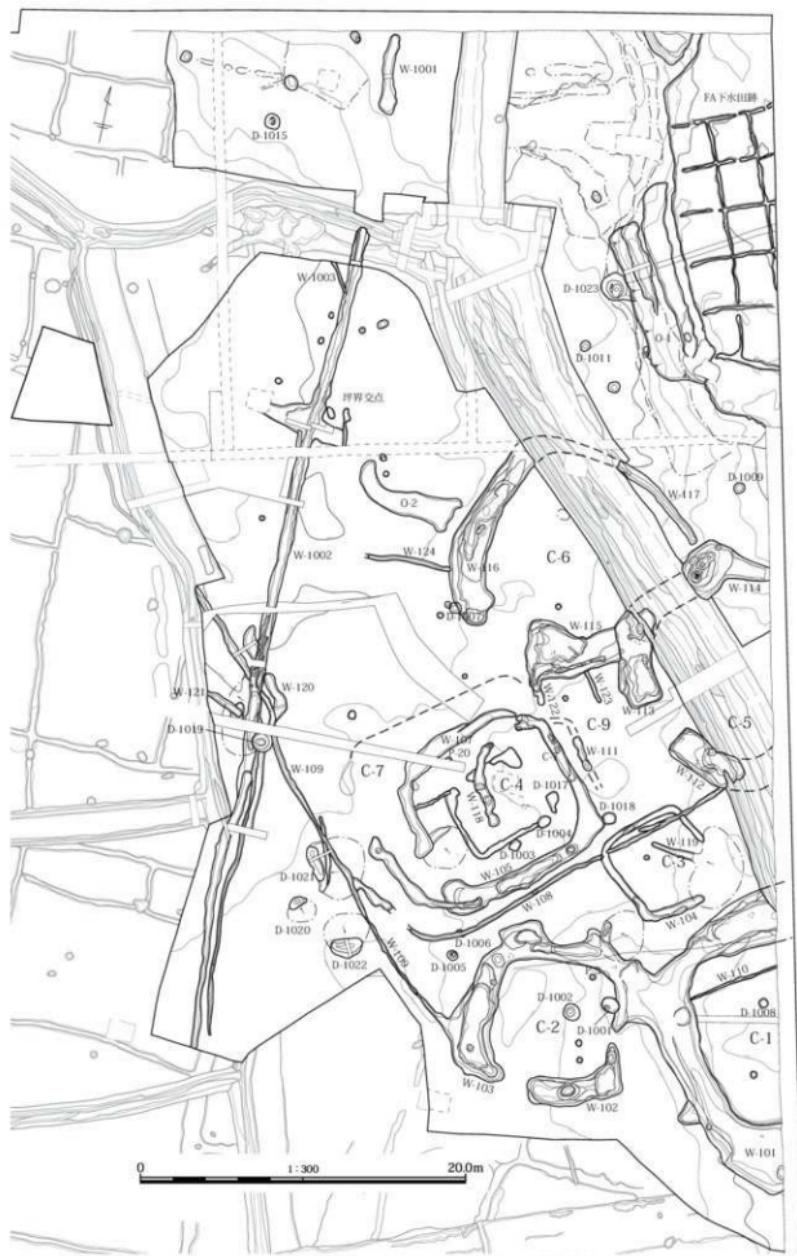


Fig. 7 古墳時代前期～平安時代（第2面）の遺構全体図

2. 古墳時代前期の遺構と遺物

該期の遺構として判断されたのは、周溝状遺構(周溝をもつ建物跡)9棟と井戸跡3基、建物跡に伴わない溝跡を7条と土坑5基である。以下、遺構毎に形態と出土遺物を説明していく。

a. 周溝状遺構(周溝をもつ建物跡)

当該遺構は複数の溝跡の集合として認識されたもので、周溝状遺構(C)の番号とは別に、個々の溝跡(W)としても付番している。以下、煩雑ではあるが双方の遺構番号を使用して説明する。

1号周溝状遺構(C-1・Fig. 9) W-101によって構成され、2号周溝状遺構のC-3と連続、南北約11mを計る。東半は調査区外で、南に陸橋部をもつ隅丸方形である。溝は確認面から30~40cm程度の深さで底面は船底状、作業単位と思われる凹凸がある。また、南端陸橋部近くの溝底に

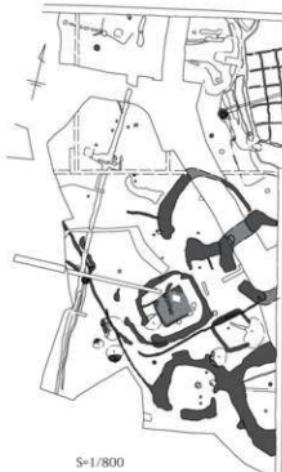


Fig. 8 古墳時代前期の遺構分布図

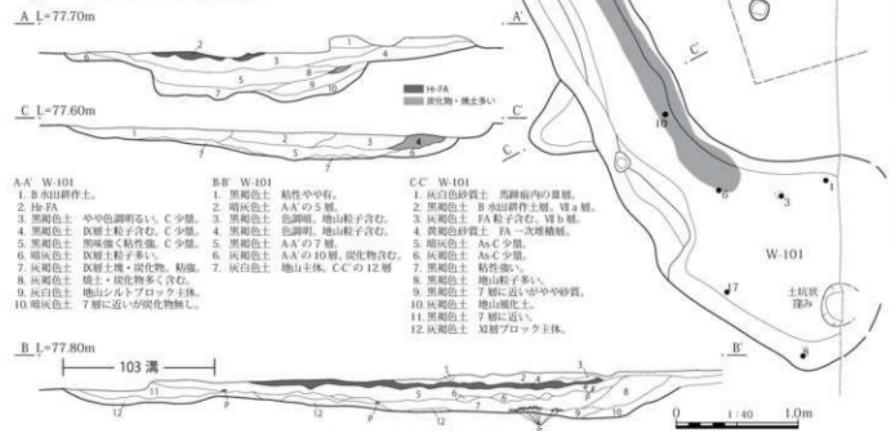


Fig. 9 1号周溝状遺構

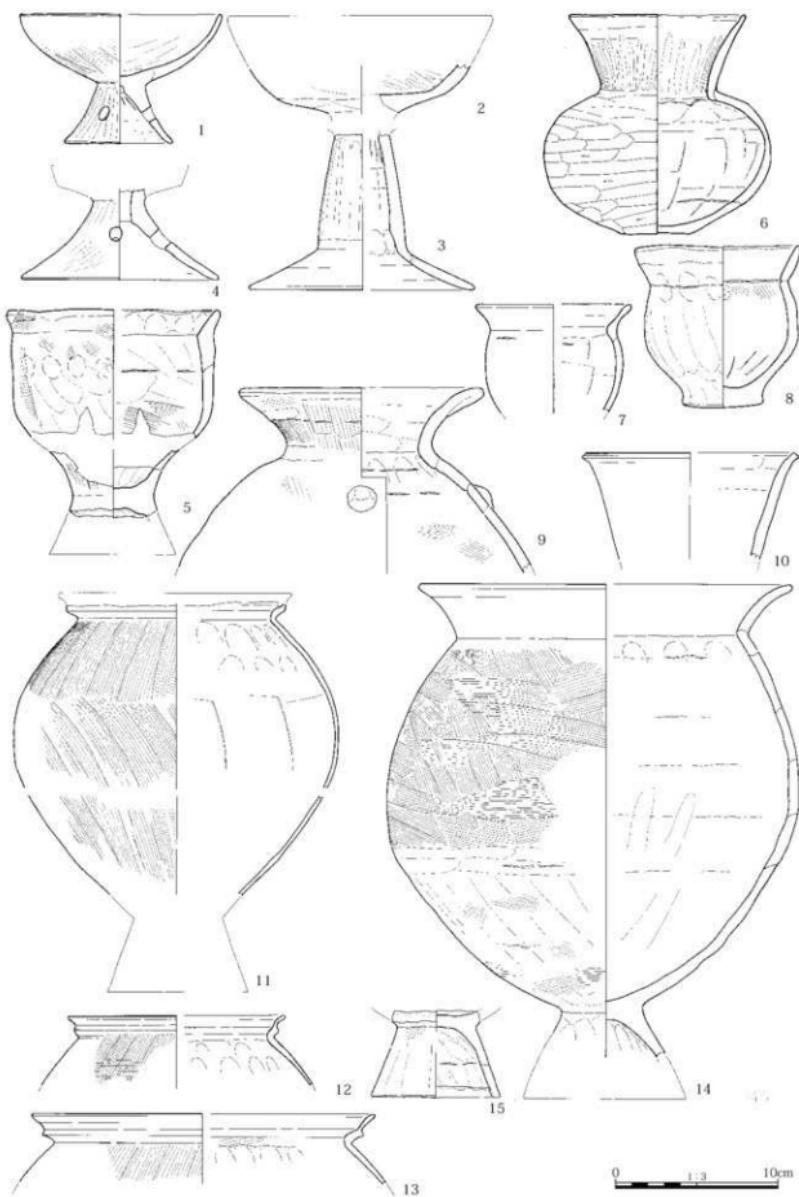


Fig. 10 1号周溝状遺構出土遺物（1）

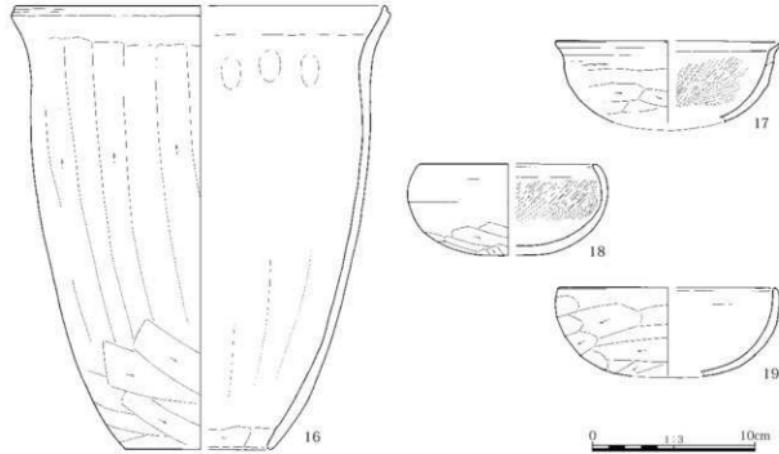


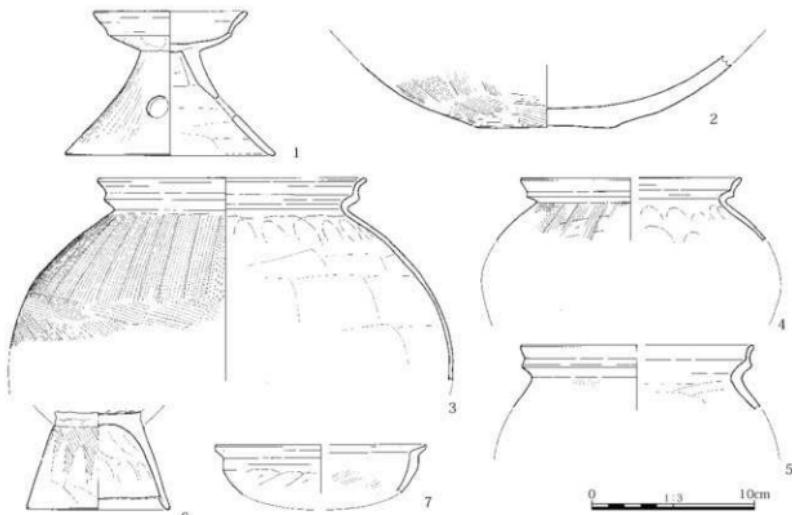
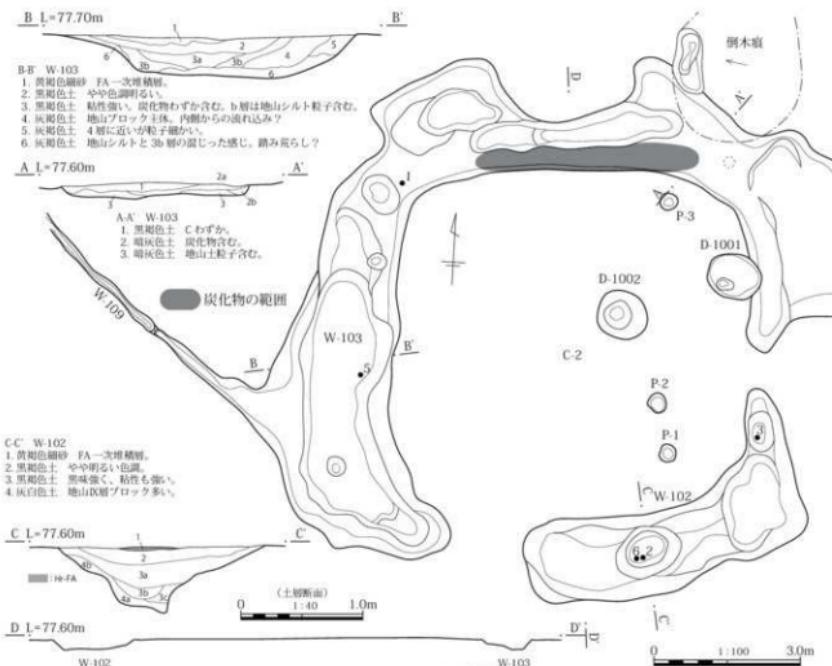
Fig. 11 1号周溝状遺構出土遺物（2）

土坑状の窪みがあり、水溜りの機能を想定できる。周溝はC軽石を含む（以下C混と略）黒色粘質土の自然堆積で埋没しており、西辺内側には炭化物・焼土が集中し、上層には周溝の全域にわたってHr-FAの一次堆積層が認められた。周溝内側から検出された溝跡（W-110）と土坑（D-1008）、小穴（P-4）は、覆土の特徴から溝跡が建物壁周溝、土坑は貯蔵穴の可能性が考えられるが、小穴については後世のものと判断される。

出土遺物には19点を図示した（Fig. 10～11・Tab.2）。1～15は古墳前期で本遺構に伴うが、16～19については古墳後期で混入と判断される。1は短脚の高杯、2は高杯の杯部、3は2と別個体だが同種の高杯脚部、4は受部を欠く器台である。5は不恰好な小形台付鉢、6～8は壺で6は球胴で壺状、8は広口で底部をもち7も同様のものであろう。9は折り返し口縁の壺で、肩部の円形浮文が特徴的なものである。10は單口縁壺の口縁部、11～13はS字状口縁の台付鉢（以下S字縁と略）で、12には肩部横線が残る。14はく字口縁の台付壺で、かなり厚ぼったい印象を受ける。15は台付壺の台部で、端部内面を折り返すことからS字縁と考えられる。16は單孔の大形瓶、17は内斜口縁環で内面に斜線暗文、18は一般に内斜口縁環と共に伴する内湾口縁環で内面には斜線暗文、19は18と比べて粗い胎土で暗文を欠くが同種の内湾口縁環である。出土状態は、1が南側溝底面から正立で出土したほか、9は北側溝底面、14は西側溝中央底面から潰れた状態、3・5・6・8は周溝覆土中位出土である。

Tab. 2 1号周溝状遺構出土遺物観察表

ID	番号	出土位置	種類	基盤	口径	底径	高さ	底の特徴	数値(cm)		口径×底径の（）は推定値	高さの（）は残存値	地・色	備考
									調整					
fig.10	1	w-101	周溝内側	土師器	高杯	(2.5)	6.6	7.9	砂粒や多い	外/片ハケ後子脚丸玉 内/片ナデ、脚ヘラナデ	片・壺	直筒	スカシ3号	残70%
fig.10	2	w-101	-	土師器	高杯	-	0.0	大形の砂粒少	外/片ケズ後子脚丸	片・茶葉	直筒	茶葉	褐色	
fig.10	3	w-101	西側中央	土師器	高杯	-	13.8	0.5	砂粒少なくては砂質目	外/腰とヒナナデ 内/腰ケズヒナナデ	片・茶葉	直筒	茶葉	褐色
fig.10	4	w-101	北側中央	土師器	脚部	-	0.5	砂粒少なくては砂質目立つ	外/腰とヒナナデ	片・茶葉	直筒	茶葉	褐色	
fig.10	5	w-101	北側中央	土師器	台付鉢	(3.0)	-	12.6	砂粒や含	外/腰とヒナナデ、内/ヒナナデ、片ナデ	片・明菊	直筒	明菊	60%
fig.10	6	w-101	北側中央	土師器	壺	10.2	4.3	13.5	砂粒や、僅か砂質目	外/11.5ミリキリナデとナダ、内/11.5ミリキリナデ	良・茶葉	直筒	砂質目方面	元形
fig.10	7	w-101	周溝外側	土師器	壺	(9.4)	-	0.7	砂粒や、砂質目	外/11.5ミリキリナデ、内/ヒナナデ腰へラナデ	良・茶葉	直筒	砂質目	褐色
fig.10	8	w-101	北側中央	土師器	壺	10.1	5.0	10.0	砂粒や、砂質目	外/11.5ミリキリナデ、内/ヒナナデ腰へラナデ	良・茶葉	直筒	茶葉	褐色
fig.10	9	w-101	北側	土師器	壺	15.1	-	(11.4)	砂粒较少、あ砂粒目立つ	外/11.5ミリキリナデヒナナデ、内/ヒナナデハグ	良・茶葉	直筒	アロシミツ	緑色
fig.10	10	w-101	北側中央	土師器	壺	(13.4)	-	(6.6)	砂粒少ない砂子や砂質	外/ヒナナデ、内/ヒナナデ	良・茶葉	直筒	茶葉	褐色
fig.10	11	w-101	東側	土師器	台付壺	-	(7.0)	砂粒较少、あ砂粒目立つ	外/11.5ミリキリナデ、内/ヒナナデヒナナデ	良・茶葉	S字縫	褐色		
fig.10	12	w-101	-	土師器	台付壺	(13.4)	-	(4.4)	砂粒和少量、砂粒和目立つ	外/11.5ミリキリナデ、内/ヒナナデヒナナデ	良・茶葉	直筒	茶葉	褐色
fig.10	13	w-101	-	土師器	台付壺	(2.5)	-	(4.3)	砂粒较少目立つ	外/11.5ミリキリナデ、内/ヒナナデヒナナデ	良・茶葉	S字縫	褐色	
fig.10	14	w-101	西側	土師器	台付壺	(2.0)	-	(8.9)	砂粒少なくては砂質目	外/11.5ミリキリナデヒナナデ、内/ヒナナデ	良・茶葉	直筒	茶葉	褐色
fig.10	15	w-101	北側	土師器	台付壺	7.9	(5.3)	砂粒少なくては砂質目	外/ヒナナデヒナナデとナダ、内/ヒナナデ	良・茶葉	直筒	茶葉	褐色	
fig.10	16	w-101	北上側	土師器	壺	(25.4)	(8.9)	27.2	砂粒多くやザザ	外/11.5ミリキリナデ、内/ヒナナデヒナナデ	良・茶葉	直筒	茶葉	褐色
fig.10	17	w-101	-	土師器	壺	(14.0)	(5.0)	砂粒目立つ	外/11.5ミリキリナデ、内/ヒナナデヒナナデ	良・茶葉	直筒	茶葉	褐色	
fig.10	18	w-101	-	土師器	壺	(11.0)	-	5.6	砂粒较少や、砂粒目立つ	外/11.5ミリキリナデ、内/ヒナナデヒナナデ	良・茶葉	直筒	茶葉	褐色
fig.10	19	w-101	-	土師器	壺	(13.4)	(5.4)	砂粒多く、砂粒目立つ	外/11.5ミリキリナデヒナナデ	良・茶葉	直筒	茶葉	褐色	



2号周溝状遺構 (C-2・Fig. 12) W-102・103によって構成され、隅丸方形で東西7.3m、南北7.2m、東辺中央と南片西寄りに陸橋部をもち、外側立ち上がりラインは乱れる。溝は確認面から10~40cm程度で、底面は不正形な船底状で掘削作業単位と思われる凹凸が顕著である。特にW-102南辺には土坑状に深くなる部分があり、C-1と同じように水溜め的な機能を想定できる。また、W-103西辺には、周溝外側北西方向から延びるW-109が重複しており、浅くて切り合は不明瞭だが同時存在の可能性がある。周溝覆土はC混黒色粘質土の自然堆積で、W-103北辺内側には炭化物の薄層が、深い部分の上層にはHr-FAが認められた。周溝内側には土坑(D-1001・1002)と小穴(P-1・2)があるが、覆土の特徴や出土遺物から土坑は古墳後期、小穴は後世のものと判断される。

出土遺物として7点を図示した(Fig. 13・Tab.3)。1~6は古墳前期で本遺構に伴うが、7は古墳後期なので混入と判断される。1は貫通孔はないが形態から器台と判断、2は壺底部で器高50cm程度の大形品であったかも知れない。3~6はS字彫で、3・4・6は石田川式では一般的なタイプだが、5は口端部が直立気味で肩も張らず、胴部も厚手で異質なものなので、あるいは他器種・他系統を疑う必要もあるか。7は内斜口縁環で、内面に斜線暗文を施す西毛地域で典型的なものである。遺物の出土状態としては、3は胸部以下をカットした状態で周溝底へ据え置かれた感じで注意されるが、それ以外の遺物は周溝覆土中から散在した状態で出土した。

3号周溝状遺構 (C-2・Fig. 14) W-104によって構成され、やや平行四辺形気味の隅丸方形で東西5.1m、南北5.4m、東側コーナー部が陸橋状に掘り残されているが、これは先行する倒木痕による地表面の盛り上がりを避けた結果と思われる。溝は確認面から10cm内外と浅く貧弱で、底面断面U字状で南側コーナー付近が細溝状に深い。周溝覆土はC混黒色粘質土の自然堆積である。また、北西辺にはW-108が重複し、調査の手違いで断面記録を残せなかつたが、平面確認時には本遺構が切っているものと判断した。他に周溝内部にはW-119とP-5があり、前者は倒木に伴う幹の压痕、後者は時期不明だが後世のものと思われる。

出土遺物は1点図示した(Fig. 14・Tab.3)。1は南側コーナー付近から出土したS字彫で、同一個体の破片は他にもあるが接合ができなかった。典型的な石田川式である。

Tab. 3 2・3号周溝状遺構出土遺物観察表

測定番号	出土位置	埋深	沿緯	口徑・底径の()	高さの()	数値はcm		形状	骨・色	備考
						推定値	残存値			
Hg.13. 1 w-102	北西下根	10cm	右側	10.0	8.8	網状孔やや少		馬+ナデ、縞えび牙、西/受ナデ、脚ヘラナデ+ケズリ	骨+他	スカラシ万回、四70% C-2
Hg.13. 2 w-102	南下根	土壠部	右	8.6	8.6	大輪の山形	赤色粘土口立	馬+ナデ、内(不明)(摩滅)	骨+他	鉄頭鉢片 C-2
Hg.13. 3 w-102	東東下根	土壠部	右付側	16.6	(12.5)	網状孔少		馬+ナデ脚+ナデ	骨+他	40% S字彫 C-2
Hg.13. 4 w-102	北中根	土壠部	右付側	(3.7)	(3.9)	網状孔少	中心の山形	馬+ナデ脚+ナデ	骨+他	40% S字彫 C-2
Hg.13. 5 w-102	南中根	土壠部	右付側	(4.4)	(4.0)	網状孔少	中心の山形	馬+ナデ脚+ナデ	骨+他	40% S字彫 C-2
Hg.13. 6 w-102	南下根	土壠部	右付側	8.8	6.0	網状孔やや少	少合意	馬+ナデ、内ナデ	骨+他	馬+ナデ、内ナデ
Hg.13. 7 w-102	南下根	土壠部	右付側	(13.1)	(10)	網状孔少	少合意	馬+ナデ+ナデ、内ナデ	骨+他	馬+ナデ、内ナデ
Hg.14. 1 w-104	南中根	土壠部	右付側	(17.9)	(5.1)	大輪網状少	脚	馬+ナデ脚+ナデ、内(ナデ脚ナデ)	骨+他	40% S字彫 C-2

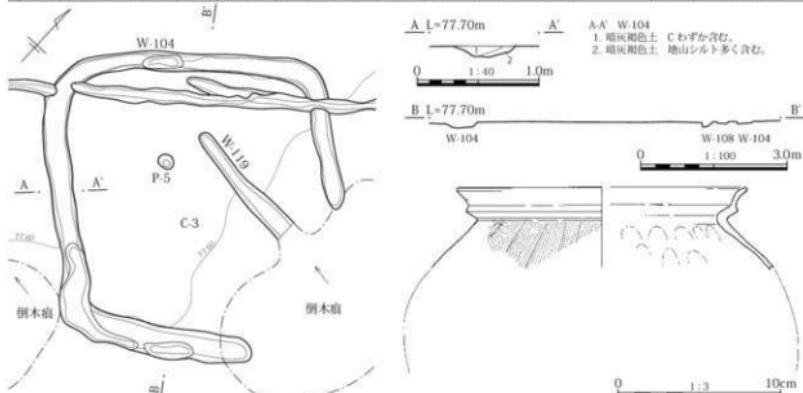


Fig. 14 3号周溝状遺構と出土遺物

4号周溝状遺構 (C-4・Fig. 15) W-105・107によって構成され、やや台形気味の隅丸方形で東西9.1m、南北8.8m、南東辺の南寄りに明確な陸橋部、北コーナー部付近にごく狭く掘り残された部分があるが、後者については周溝底面の深い部分と判断される。7・8号周溝状遺構 (C-7・8) と重複し、本遺構が最も古い。周溝は確認

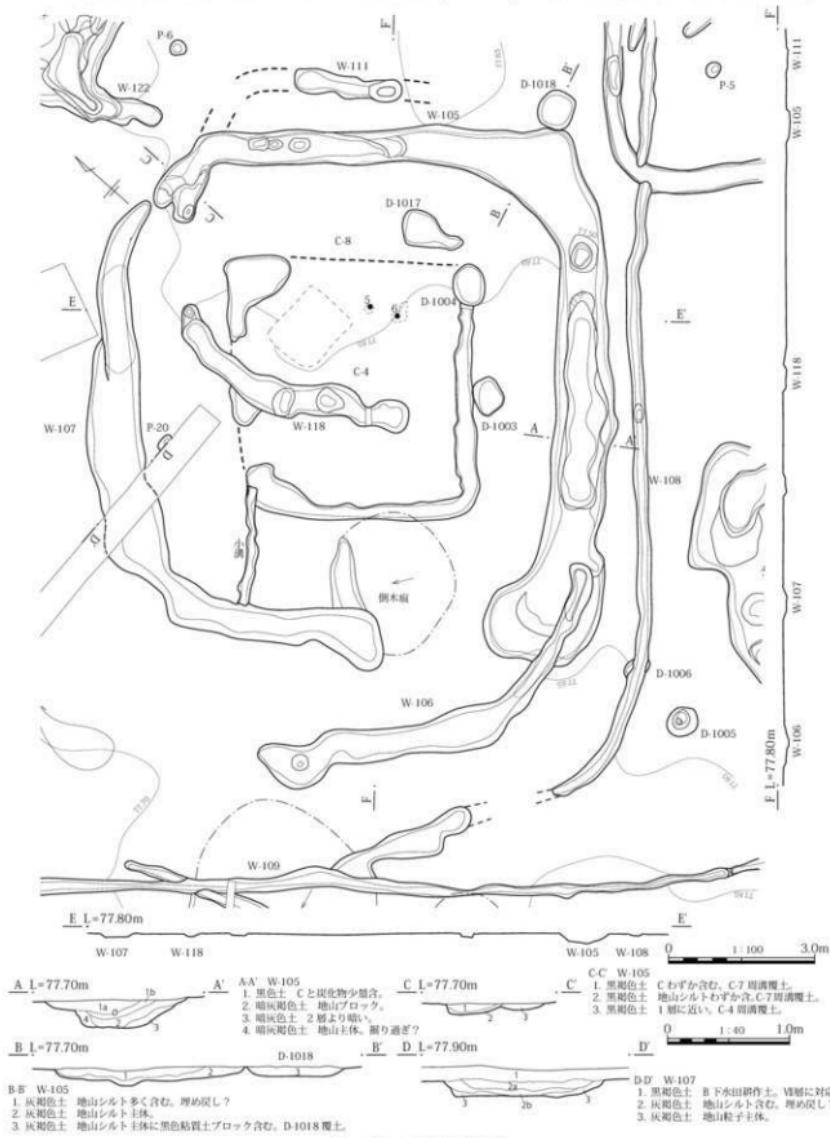


Fig. 15 4号周溝状遺構

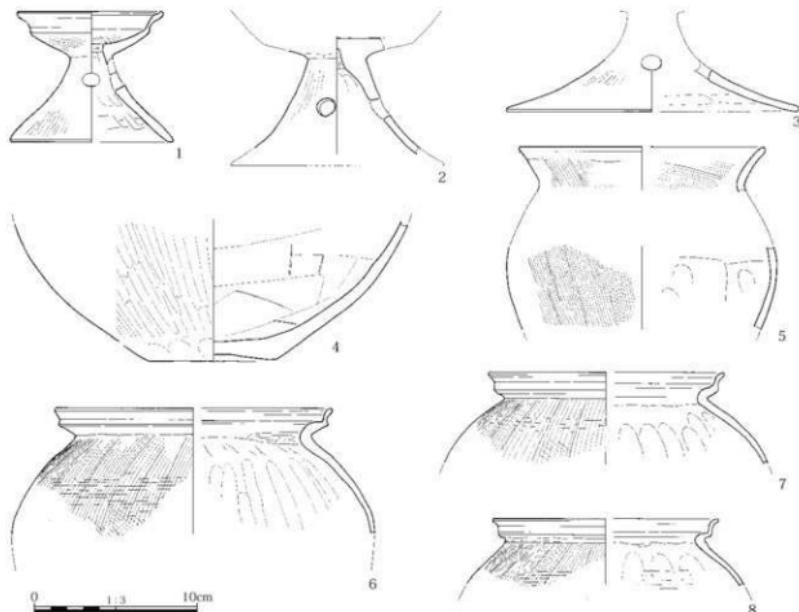


Fig. 16 4号周溝状遺構出土遺物

面から10~25cm程度、C-7・8と共に用する南東辺が深く、底面船底状で凹凸は少ないが南東辺溝の東コーナー部寄りに水溜め状の円形窪みがある。周溝覆土は南東辺がC混黒色粘質土の自然堆積、その他は地山シルト粒子が多く、C-7・8の設営に埋め戻されたと考えられる。周溝内部には建物に伴うホリカタが残り、南東・南西辺は壁周溝を思わせる溝状、底面には連続した掘削工具痕が観察された(PL-4左下参照)。一方で北西辺から北コーナー部にかけては、一般的な豊穴建物のホリカタと同様である。また、ホリカタ西コーナー部から延びる小溝は周溝W-107とつなげており、排水溝と推定される。柱穴は精査したが見当たらず、置柱と思われる。却是確認できなかつたが、C-7を構成するW-118に破壊された可能性がある。周溝の内側には他に土坑(D-1003・1004・1017)、小穴(P-20)と倒木痕がある。覆土や出土遺物から、土坑のうちD-1003・1004は古墳後期以降、D-1017は古墳前期でC-7周溝の一部か本遺構に付帯する可能性もある。小穴は後世、倒木痕は本遺構以前で時期不明である。

出土遺物として8点を図示した(Fig. 16-Tab.4)。全て古墳前期だが、C-7・8との混乱は必至であろう。1は器台、2~3は高环で3は裾が大きく開く。4は壺底部、5はく字彫、6~8はS字彫で肩横線が残るやや古手のものである。遺物の出土状態としては、5が建物部分の床面相当、6は建物床面相当と周溝南東辺(W-105)覆土中の接合で時期を推し量る素材となるが、他は南東辺の周溝(W-105)覆土中からまとまって出土した。

Tab. 4 4号周溝状遺構出土遺物観察表

回 数	番号	出土位置	種別	基盤	口径	高さ	出土の特徴	測定		口径・底径の()は推定値	高さの()は残存値	備考
								幅	厚			
fig.16	1	w-105 南東辺	土器底	壺	9.1 (11.1)	8.0	縦斜面微量 破壊	外 / 突チテミガラセガキ	内 / 金ナガミヒミガラセガキナダ・ケヅリ	口: 没湖 底: 70% 調査済		
fig.16	2	w-105 南東辺	土器底	壺	-	17.2	脚細めくびづつく	内 / 金ナガミヒミガラセガキナダ	外 / 三五孔	口: 没湖 底: 3.9% 向		
fig.16	3	w-105 南東辺	土器底	高杯	-	18.0 (13.2)	脚細めくびづつく	内 / 三五孔	外 / ニナナデ	口: 没湖 底: 6%		
fig.16	4	w-105 南東辺	土器底	壺	-	7.9 (6.5)	内 / 金ナガミヒミガラセガキナダ	内 / 三五孔	外 / 二五孔	口: 没湖 底: 7.5%		
fig.16	5	C-4 壁79号	土器底	台付壺?	15.2	11.3	脚細め立つ	外 / 二ナナデヒマナダ	内 / 二ナナデヒマナダ	口: 没湖 底: 2.5% 南西束系?		
fig.16	6	C-4 壁79号	土器底	台付壺?	17.2	-	脚細めくびづつく	外 / ロナナデヒマナダ	内 / ロナナデヒマナダ	口: 没湖 底: 5.5% 5字裏		
fig.16	7	w-105 南東辺	土器底	台付壺?	14.0	5.6	脚細め立つ	外 / ハナナデヒマナダ	内 / ハナナデヒマナダ	口: 没湖 底: 5字裏		
fig.16	8	w-105 南東辺	土器底	台付壺?	14.0	4.0	脚細め少量	外 / ハナナデヒマナダ	内 / ハナナデヒマナダ	口: 没湖 底: 5字裏 小凹		

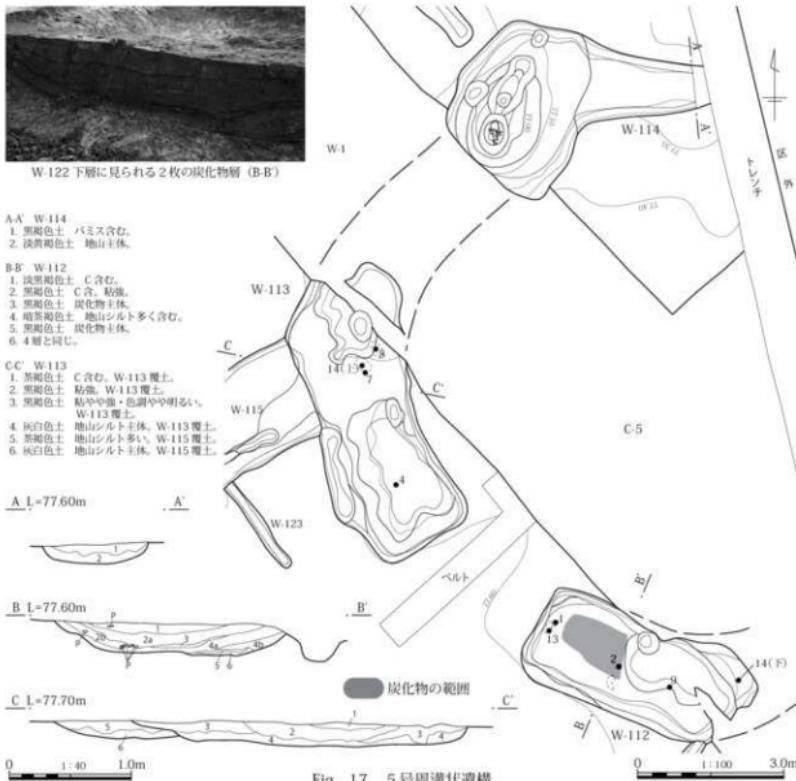


Fig. 17 5号周溝状遺構

5号周溝状遺構 (C-5・Fig. 17) W-112・113・114 東半によって構成され、円形気味の隅丸方形である。重複遺構と調査区外にかかる関係から正確な規模は不明だが、概ね10m四方と考えられる。南西辺中央と北東辺中央に陸橋部をもち、南西辺のそれは直線的で立ち上がりも端正だが、北東辺は谷にかかるて自然消滅する雰囲気である。溝は確認面から20～30cm程度で、底面は不正形な底状で掘削作業単位と思われる凹凸が目立つ。W-112の内側底面には土坑状に一際深くなる部分があり、水溜め的な機能を想定できる。また、W-112南端には南西方向から延びるW-108が合流するが、切り合い関係は判然としないが同時存在の可能性がある。周溝覆土

Tab. 5 5号周溝状遺構出土遺物観察表

図 面 番 号	出土位置	標高	距離	1辺	底辺	底辺の形状	調査	数値は()		地 質	推定 量	参考	
								口径	底径				
fig.18	1 - 112 西平面上	土壌層	0	9.9	2.8	7.3	斜面少部 底面の断面	外ノリハナ後ナメナダ	内ノリハナ後ナメナダ	青・黄泥	全表面積 約 80%		
fig.18	2 - 112 中央下斜	土壌層	0	14.7	7.9	10.8	傾斜多く 赤色鉄かつ	外ノリハナ後ナメナダ	内ノリハナ後ナメナダ	青・淡泥	約 90%		
fig.18	3 - 113 一筋	土壌層	0	(12.9)	(7.1)	(7.1)	傾斜やや多い	外ノリハナ後ナメナダ	内ノリハナ後ナメナダ	青・灰泥	傾斜 4点		
fig.18	4 - 113 中央下斜	土壌層	0	9.3	10.8	7.5	大いに傾斜やや多い	外ノリハナ後ナメナダ	内ノリハナ後ナメナダ	青・灰泥	スカシヨウ向日2段	株 80%	
fig.18	5 - 113 一筋	土壌層	0	12.5	(16.2)	大いに傾斜やや多い	外ノリハナ後ナメナダ	内ノリハナ後ナメナダ	青・灰泥	スカシヨウ向日2段	株 80%		
fig.18	6 - 113 一筋	土壌層	0	(18.2)	13.5	大いに傾斜やや多い	外ノリハナ後ナメナダ	内ノリハナ後ナメナダ	青・灰泥	植生	元耕牧地		
fig.18	7 - 113 北平上斜	土壌層	0	13.3	(9.2)	大いに傾斜やや多い	外ノリハナ後ナメナダ	内ノリハナ後ナメナダ	青・灰泥	植生	元耕牧地		
fig.18	8 - 113 北平下斜	土壌層	0	(16.0)	(13.8)	15.0	大いに傾斜や	外ノリハナ後ナメナダ	内ノリハナ後ナメナダ	青・淡泥	植生	元耕牧地	
fig.18	9 - 112 東中斜	土壌層	0	(11.5)	(11.5)	傾斜多く、大いに傾斜	外ノリハナ後ナメナダ	内ノリハナ後ナメナダ	青・淡泥	植生	元耕牧地		
fig.18	10 - 113 一筋	土壌層	0	(12.0)	(5.0)	傾斜やや多い	外ノリハナ後ナメナダ	内ノリハナ後ナメナダ	青・淡泥	植生	植生		
fig.18	11 - 113 一筋	土壌層	0	(14.8)	(2.6)	大いに傾斜やや多い	外ノリハナ後ナメナダ	内ノリハナ後ナメナダ	青・灰泥	5号井	砾石		
fig.18	12 - 113 台付裏	土壌層	0	9.6	(19.2)	傾斜傾きだらけでカッキリ	外ノリハナ後ナメナダ	内ノリハナ後ナメナダ	青・淡泥	5号井	30%		
fig.18	13 - 112 西平上	土壌層	0	(8.8)	(7.5)	傾斜傾きだらけでカッキリ	外ノリハナ後ナメナダ	内ノリハナ後ナメナダ	青・灰泥	5号井	御前川河床段階段		
fig.18	14 - 112 北平下斜	土壌層	0	16.2	9.8	31.3	傾斜多く、赤色鉄かつ	外ノリハナ後ナメナダ	内ノリハナ後ナメナダ	青・明泥	5号井	御前川河床段階	
												傾斜傾きが多い	

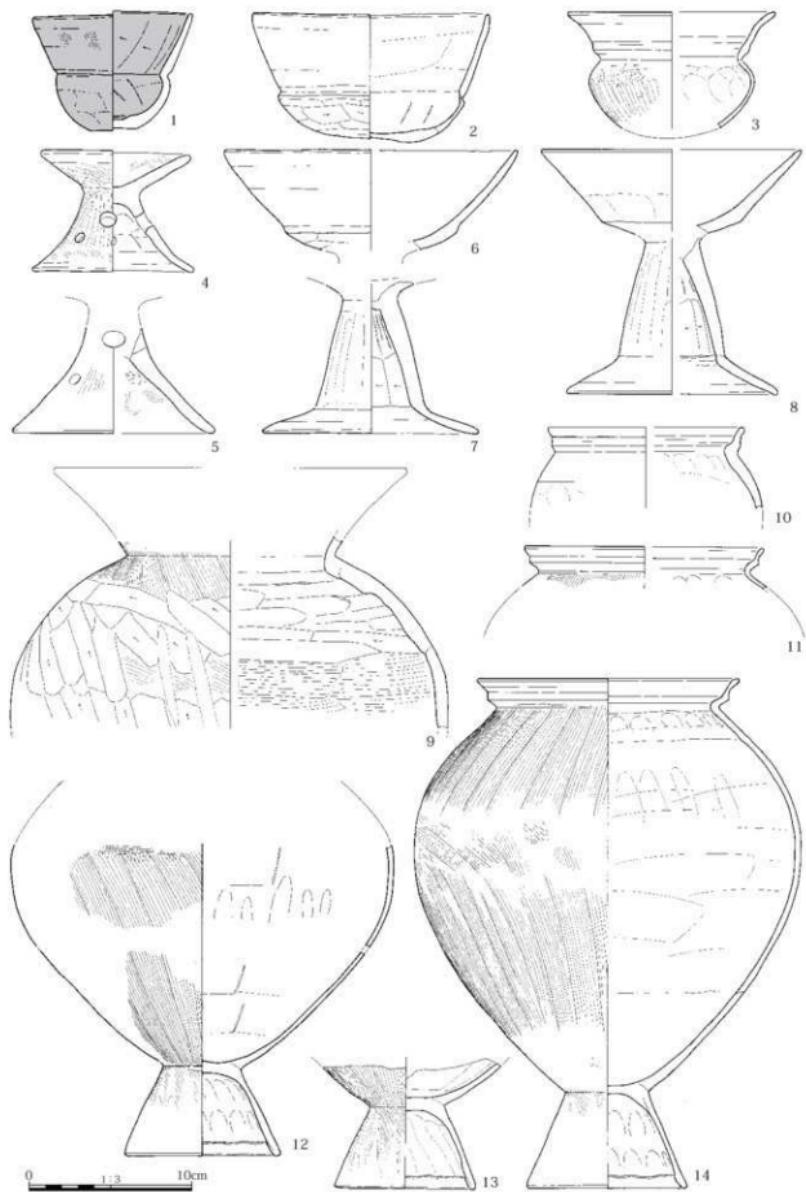
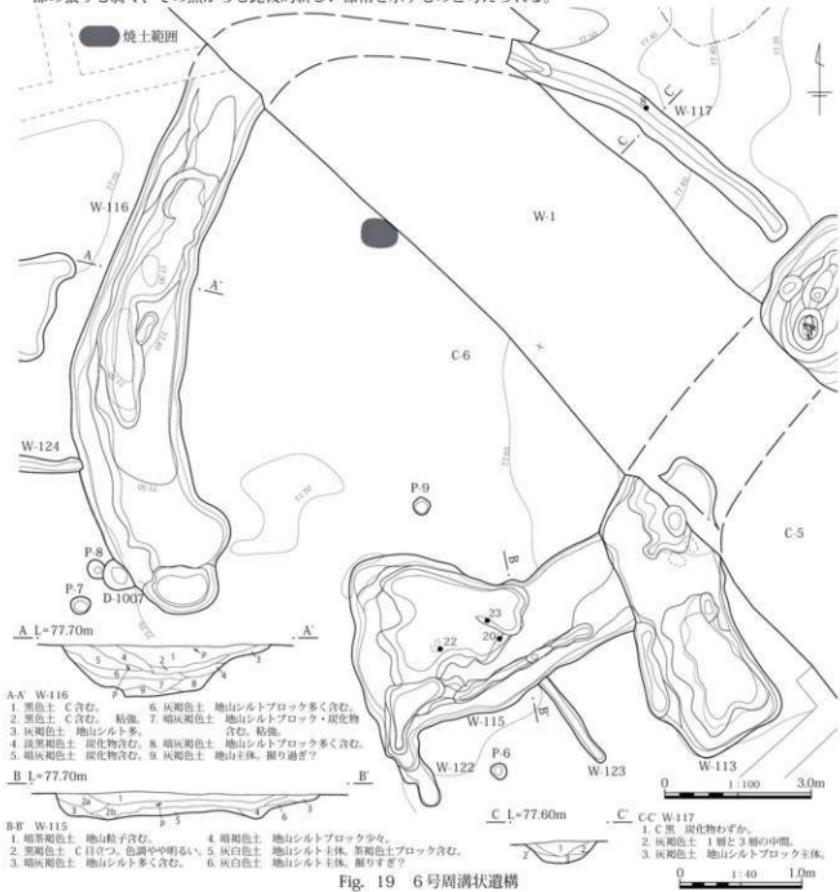


Fig. 18 5号周溝状遺構出土遺物

はC混黒色粘質土の自然堆積で、W-112最下層に薄い間層を挟み2枚の炭化物層が認められた。なお、本遺構W-113は6号周溝状遺構のW-115を切っていることから、状況的に5号周溝状遺構の北西辺は6号周溝状遺構を取り込んでいると考えられる。また、本遺構中央部分は中・近世溝跡のW-1、W-114西半部分は奈良・平安時代の溜井状土坑に破壊されている。周溝内側の建物構造については、全く不明である。

出土遺物は14点を図示した(Fig. 18・Tab.5)。6～8は古墳中期の混入と考えられるが、その他は古墳前期で本遺構に伴うと判断される。しかし重複関係からは、6号周溝状遺構からの混入は必至である。1～3は壇で、1は小形丸底のだが底部が平底、2はやや大形で不恰好、3は頭部の形状と胴部器厚が著しく薄い点からS字彫の影響を窺える。4は貫通孔が無いものの形態から器台、5は高环脚部でいわゆる元屋敷系のプロポーションが想定される。6～8は古墳中期の高環で、脚部内面の横ヶズリと外面下位の棱が特徴的である。9は壺、10は小形壺で口縁部形状からは東海地方以外の系譜なのかも知れない。11～14はS字彫で、全て肩部横線は無い。14は胴部の張りも弱く、その点からも比較的新しい様相を示すものと考えられる。



6号周溝状遺構 (C-6・Fig. 19) W-115・116・117によって構成され、台形気味の隅丸方形である。重複遺構との関係から東西幅はやや不確定だが最大11m、南北はほぼ10mである。南辺西寄りに大きく開く陸橋部があり、後述する9号周溝状遺構の改変も相まって前方後方形を呈している。北東コーナー部にも陸橋部がある可能性もあるが、5号周溝状遺構と溜井状土坑の重複、地形が谷に向かって落ち始めている点から判然としない。溝は確認面から20~40cm程度で、W-116の方が深い。底面はW-115が銅底状、W-116は船底状を呈しており、掘削作業単位に由来するであろう凹凸が目立つ。また、W-115外側の立ち上がりは、9号周溝状遺構によって改変されて溝状に窪んでいるが、土層断面では明確な切り合い関係は認め難い。周溝の覆土はC混黒色粘質土の自然堆積で、最下層には整地土風の土が認められた。他遺構との重複関係としては、本遺構W-115は5号周溝状遺構を構成するW-113に切られしており、状況的に本遺構の東辺は5号周溝状遺構北西辺に利用されつつも破壊されていることになる。先述の9号周溝状遺構とは、土層断面では明確な切り合いが認められなかったことから、9号周溝状遺構北西辺は本遺構W-115を利用して構築されたと判断される。また、W-115にはW-123、W-116にはW-124が重複しているが、覆土が薄く切り合い関係は把握できなかった。他に北東コーナー付近には奈良・平安時代の溜井状土坑、周溝内の北東半分近くを中近世の溝跡(W-1)により大きく破壊されている。周溝内の残された範囲からは、小穴(P-9)と焼土範囲1箇所が検出された。小穴は覆土の特徴から後世と考えられるが、焼土範囲には古式土師器細片が含まれており、位置が微妙ではあるが跡跡の残骸と推定しておきたい。

出土遺物は24点を図示した(Fig. 20~21・Tab.6)。全て古墳前期なので本遺構に伴うと判断される。1・2は器台で、共に良く似た形態である。3~9は高杯で、3~5は短脚、全て坪部が塊形である。3は1号周溝状遺構に酷似するものがある。6・9はいわゆる元屋敷系だが、9は脚部外面の上端に平行沈線文があり、東海西部の弥生後期の高杯に系譜が迫れるものかも知れない。7は屈曲して外反する特徴的口縁部で、在地の弥生土器や東海西部の古式土師器には似たものが無い。この点については後述する。8についてもやや異質な雰囲気の脚で、胎土の特徴からは7と同一個体の可能性がある。10は咲、11広口壺、12は壺、13はいわゆるバレススタイルの壺で、単位数不明だが棒状浮文、内面には綾杉文と竹管文、内外面赤彩である。14は折り返し口縁の大形壺で、図上復元で心許ないが南関東系と考えておきたい。15~22はS字甕で、15は小形品だが他は比較的大形である。16・17はハケで器面を搔き均しており、石田川式に一般的なケズリ後ハケではない。また、小形品を除き内面頸部にハケが入り、故地に近い特徴を残す。反面、口縁部の屈曲が緩い点や、21のように脚端内面の折り返しを欠くものもある。とはいえS字甕は、当地においては古段階のものと看做し得る。出土状態は特徴的なものは無く、周溝内から漫然と破片化した状態で出土しており、各溝間での接合関係も多い。

Tab. 6 6号周溝状遺構出土遺物観察表

図 番号	寸法(直面)	種類	器種	口径	底径	高さ	出土の特徴	数値はcm		口径・底径の()は推定値	高さの()は残存値	備考
								調査	寸・色			
fig.20_1	w-116-1-1	土師器	高杯	20.0	10.0	6.5	脚部多く、大脚少脚	外:受子テラコッタと土器底ガラス 内:受子ガラスヘラナデ	青・淡黄	40%	紅泥無釉	
fig.20_2	w-116-1-2	土師器	高杯	20.0	10.0	7.5	脚部多く、大脚少脚	外:受子テラコッタと土器底ガラス 内:受子ガラス不明	青・淡黄	70%		
fig.20_3	w-116-1-3	土師器	高杯	19.0	10.0	7.0	脚部多く、大脚少脚	外:受子テラコッタ 内:受子ガラス不明	青・淡黄	30%		
fig.20_4	w-116-1-4	土師器	高杯	18.0	7.7	7.3	脚部多く	外:受子テラコッタと土器底ガラス 内:受子ガラス不明	青・淡黄	50%		
fig.20_5	w-116-1-5	土師器	高杯	5.4	5.4	5.4	脚部多く、大脚少脚	外:受子テラコッタと土器底ガラス 内:受子ガラスケズリ	青・淡黄	30%		
fig.20_6	w-116-1-6	土師器	高杯	17.4	14.5	6.0	脚部多く、赤色目口づ	外:受子テラコッタと土器底ガラス 内:受子ガラス	青・淡黄	30%		
fig.20_7	w-115+116-1-7	土師器	高杯	22.8	11.0	5.6	大脚多く	外:受子テラコッタと土器底ガラス 内:受子ガラス	青・淡黄	50%		
fig.20_8	w-117-1-8	土師器	高杯	12.4	8.9	5.9	脚部多く	外:受子テラコッタと土器底ガラス 内:受子ガラス	青・淡黄	大脚		
fig.20_9	w-116-1-9	土師器	高杯	(5.8)	(5.8)	(5.8)	脚部多く	外:脚部洗削痕 内:脚部痕	青・粉白	脚部平行洗削文、内:脚部痕		
fig.20_10	w-116-1-10	土師器	高杯	(11.7)	(6.2)	(6.2)	脚部多く、赤色目口づ	外:受子テラコッタと土器底ガラス 内:受子ガラス	青・淡黄	脚部平行洗削文、内:脚部痕		
fig.20_11	w-116-1-11	土師器	高杯	(12.0)	(6.0)	(6.0)	大脚多く	外:受子テラコッタと土器底ガラス 内:受子ガラス	青・淡黄	40%		
fig.20_12	w-116+117-1-12	土師器	高杯	(14.8)	(8.0)	(8.0)	脚部多く、大脚少脚	外:受子テラコッタと土器底ガラス 内:受子ガラス	青・淡黄	大脚、底無		
fig.20_13	w-116-1-13	土師器	高杯	(16.8)	(8.0)	(8.0)	脚部多く、赤色目口づ	外:受子テラコッタと土器底ガラス 内:受子ガラス	青・淡黄	40%		
fig.20_14	w-116-1-14	土師器	高杯	(20.0)	(12.0)	(12.0)	脚部多く、赤色目口づ	外:受子テラコッタと土器底ガラス 内:受子ガラス	青・淡黄	40%		
fig.20_15	w-116-1-15	土師器	高杯	(22.8)	(13.7)	(13.7)	脚部多く、竹管文	外:受子テラコッタと土器底ガラス 内:受子ガラス	青・淡黄	40%		
fig.20_16	w-116-1-15	土師器	高杯	(17.0)	(10.0)	(10.0)	脚部多く、竹管文	外:受子テラコッタと土器底ガラス 内:受子ガラス	青・淡黄	40%		
fig.20_17	w-116-1-16	土師器	高杯	(20.0)	(8.7)	(8.7)	脚部多く	外:受子テラコッタと土器底ガラス 内:受子ガラス	青・淡黄	40%	底無	
fig.20_18	w-111-1-17	土師器	高杯	(19.4)	(13.4)	(13.4)	脚部多く	外:受子テラコッタと土器底ガラス 内:受子ガラス	青・淡黄	5.7	底無	
fig.20_19	w-116-1-18	土師器	高杯	(22.5)	(12.0)	(12.0)	脚部多く	外:受子テラコッタと土器底ガラス 内:受子ガラス	青・淡黄	5.7	底無	
fig.20_20	w-116-1-19	土師器	高杯	(22.5)	(12.0)	(12.0)	脚部多く	外:受子テラコッタと土器底ガラス 内:受子ガラス	青・淡黄	5.7	底無	
fig.20_21	w-116-1-20	土師器	高杯	(17.7)	(10.5)	(10.5)	脚部多く、大脚少脚	外:受子テラコッタと土器底ガラス 内:受子ガラス	青・淡黄	5.7	大脚	
fig.20_22	w-116-1-21	土師器	高杯	8.8	7.7	7.7	脚部多く	外:受子テラコッタと土器底ガラス 内:受子ガラス	青・淡黄	5.7	大脚、脚部斜め	
fig.20_23	w-116-1-22	土師器	高杯	(19.4)	(12.0)	(12.0)	脚部多く	外:受子テラコッタと土器底ガラス 内:受子ガラス	青・淡黄	5.7	底無	
fig.20_24	w-117-1-23	土師器	高杯	9.9	8.9	8.9	脚部多く	外:受子テラコッタと土器底ガラス 内:受子ガラス	青・淡黄	5.7	底無、脚部斜め	

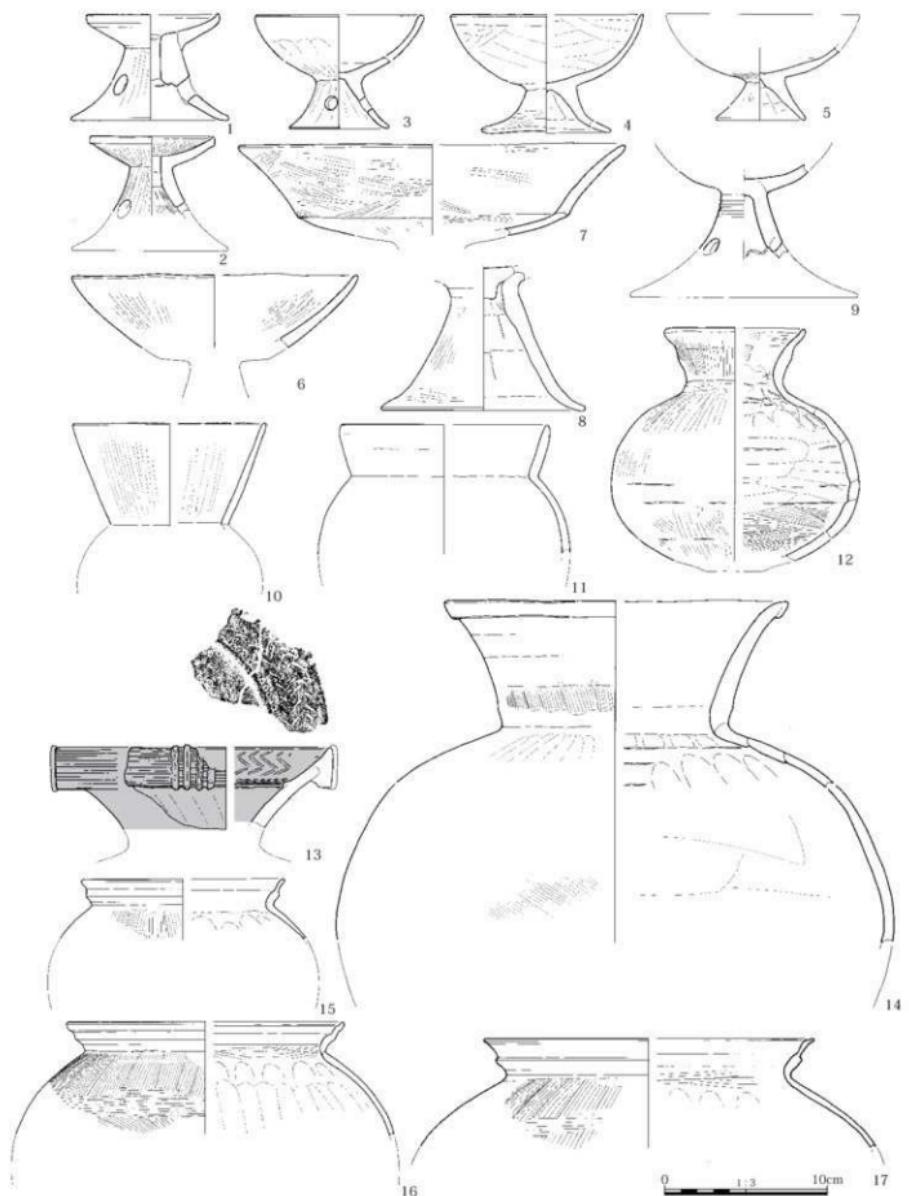


Fig. 20 6号周溝状遺構出土遺物(1)

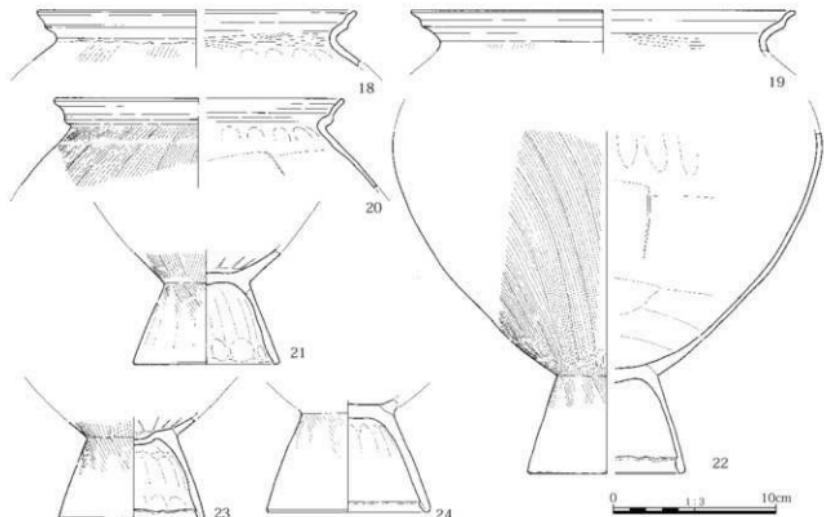


Fig. 21 6号周溝状遺構出土遺物（2）

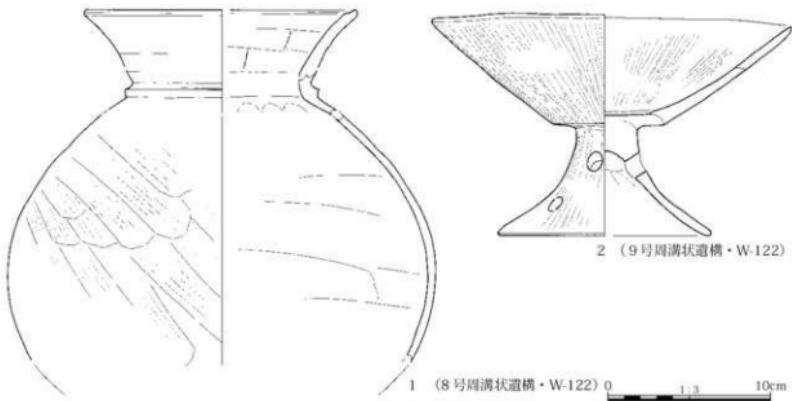


Fig. 22 8・9号周溝状遺構出土遺物

7号周溝状遺構 (C-7・Fig. 23) W-106 aとW-106 bで構成され、4号周溝状遺構 (C-4) を包括している。周溝は浅く、南西辺中央北寄りに陸橋部があるが、北西辺と北東辺は溝自体が判然としない。C-4の拡張として理解され、C-8より古い。出土遺物は古式土師器細片がW-106 aにあるが、図示に耐えうるものは無い。

8号周溝状遺構 (C-8・Fig. 23) W-111とW-118・W-105によって構成され、D-1018も可能性がある。W-105・105bの切り合いからC-4以降である。6m × 7mの小判形で、周溝は部分的な残存だが、北西辺中央には陸橋部をもつ。出土遺物は1点図示した (Fig. 22・Tab.7)。頸部に突帯をもつ單口縁壺で、胸部がW-118から、口縁部はW-105から出土しているが、直接接合しない。W-105がC-8周溝に利用されたことの証左となろう。

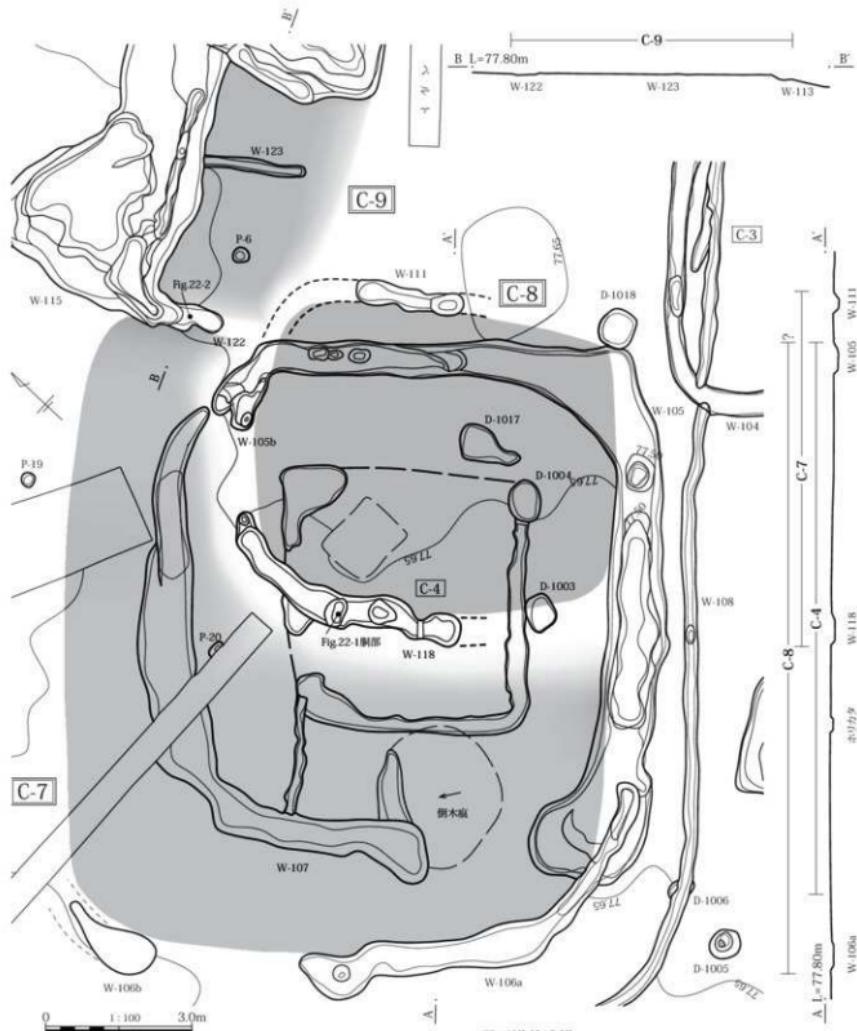


Fig. 23 4・7・8・9号周溝状遺構

9号周溝状遺構 (C-9・Fig. 23) W-121とW-115南東外側の溝状窪み・W-113西外側の溝状窪みから整理段階で認定したが、小形で不定形なプランである。内側に溝跡 (W-123) と小穴 (P-6) が重複し、W-123は断面観察から本遺構以前、P-6は覆土の特徴から後世と考えられる。出土遺物は1点図示した (Fig. 22・Tab.7)。ほとんど完形の高环で、いわゆる元屋敷系の典型的なものである。W-122から破片化して出土している。

Tab. 7 8・9号周溝状遺構出土遺物観察表

図 No.	番号	出土箇所	種別	直径	底径	高さ	測定	地盤	備考
fig.22	1	W-118	土塁跡	117.0	—	121.8	溝跡多く比較的細長	外／口ナメ剥離ナメ 内／口ヒラナメ剥離ナメ	D. 底成 底30% 売出地盤 C-9
fig.22	2	W-122	土塁跡	22.3	13.2	13.6	溝跡多くやや粗大	外／环ミガキ壁と内／环ミガキ壁と内／环ケズ後ミガキ壁ナメ	P. 基壇 底90% 黒層有 C-9

b. 井戸跡

古墳時代前期の土坑として調査した遺構のうち、基盤層である畠層まで達する深いものを井戸跡と判断した。遺物注記等による後年の混乱を防ぐ観点から、やや煩雑だが略称は調査時遺構名のまま説明する。

1号井戸跡 (調査時遺構名 D-1015・Fig. 24) 周溝状遺構群から北西方に離れた、旧河道へ向かって北へ緩く下がり始める場所に位置する、平面円形で断面は逆切頭円錐、口径 0.9 ~ 1.0m、底径 0.5m、深さは確認面から 0.95m である。覆土は C 混黒色粘質土の自然堆積で、下層は地山土を多く含んでいるが壁面崩落土の範疇で理解されるものでしょろい。下層から土師器の壺と台付甕が出土しており、壺 (Fig. 25-1) は覆土中から横倒しの状態で内部の上半分に空洞を残し、台付甕は一個体分に満たない破片状態で、口縁部付近の大形破片は底面に接していた。出土遺物は 2 点を図示した (Fig. 25-1 ~ 2・Tab.8)。1 は単口縁の壺で、口端部に磨滅の進んだ僅かな欠けと、胴部に刃物傷? を認めるが完形で、すり減った器面の特徴からは釣瓶的な使用も想起される。2 は S 字甕で、口縁部から胴部上半までは一周する残存状態だが、それ以下は直接の接点が無い破片である。器表面の保存状態は本遺跡最良で、外面の口縁部と肩部下から胴部中位までの範囲にはぶ厚いタール状のススが、内面口端部には受部への落し蓋を予想させるシルエットと吹きこぼれ状のシミ、胴部下半には帯状のコゲが付着している状態が観察された。S 字甕の使用方法を検討するうえで重要な資料となる。

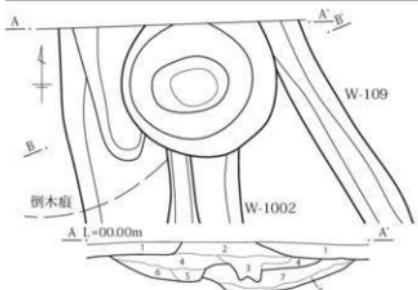
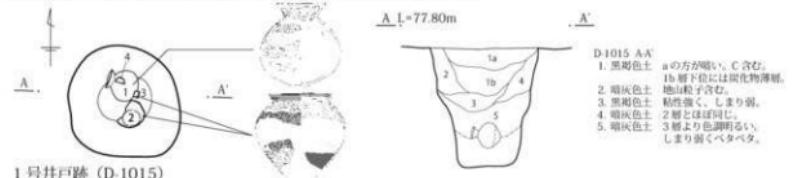


Fig. 24 井戸跡

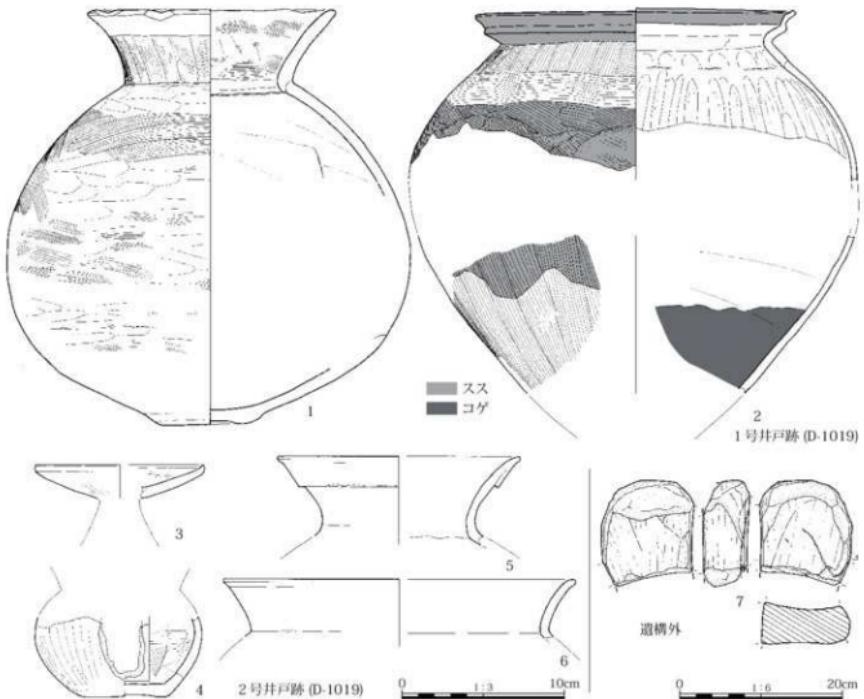


Fig. 25 井戸跡・遺構外出土遺物

2号井戸跡（調査時遺構名D-1019・Fig. 24）周溝状遺構群の西方にやや離れた場所にある。同時期と考えられる溝跡W-109と重複しているが、土層断面上は同時存在と理解できるので、双方にとって付帯施設と言える。平面円形で断面は逆切頭円錐状、口径1.1m、底径0.35m、深さは確認面から最大1.0mである。調査時の不備で土層断面図の作成はしていないが、掘り下げ時の所見ではC混黒色粘質土の自然堆積で、下層には地山土を多く含みしまりは弱い。また、本遺構の直上には奈良・平安時代の溝W-1002が重複し上面は破壊されている。さらに本遺構のベースには大規模な倒木痕があり、かなり乱れていた。上～中層からは土師器破片がある程度まとまって出土しているが、接合率はあまり良くなく、混入的な雰囲気が強いものである。出土遺物としては4点を図示した（Fig. 25-3～6・Tab.8）。3は器台、4は胴部に焼成後の穿孔がある甕、5は折返し口縁壺、6はく字口縁の甕で、南関東系の台付甕と思われる。他に図示に至らなかったがS字縫の胴部破片もある。

3号井戸跡（調査時遺構名D-1023・Fig. 24）建物遺構群の北方に離れた場所にあり、旧河道由来の谷地に向かって落ち込む肩部に相当する。平面は円形で断面は漏斗状、口径1.6m、底径0.3m、深さは確認面から0.9mであるが、東方谷方向に開くステップ状の部分があり特徴的である。なお、この部分は時間切れで現場での十分な検討が果たせていないが、谷地へ水を落とす付帯施設とも推定された。土層断面図についてはやはり断面記録が作成できなかつたが、掘り下げ時の所見では他の井戸跡とした土坑同様、C混黒色粘質土の自然堆積で、下層には地山土を多く含むしまりの弱いものであった。また、漏斗状の屈曲部には大ぶりな自然石が張り付いており、足掛け石のように思われた。遺物は上中層からS字縫破片等が若干出土したが、図示には至らなかつた。

C. 土坑 (Fig.26)

古墳時代前期の土坑として確実なのは、D-1008とD-1011のA基である。他にD-1020・1021・1022から古式土器細片が出土しているが、倒木に伴う窪地である。なお、D-1017・1018も覆土の特徴から該期と思われるが、D-1017は4号周溝状遺構内側の建物跡に、D-1018は8号周溝状遺構に伴うと思われた。

ここでは、D-1008と1011について説明しておく。

D-1008は1号周溝状遺構の内側に位置する。平面形状は円形、口径0.8m、深さ0.55mの円筒状である。覆土は自然堆積でC混黒色粘質土、2層下位に炭化物が集中していた。出土遺物は無い。

位置関係から1号周溝状遺構に伴う可能性があり、W-110を建物の壁周溝とすれば、貯藏穴と思われる。覆土中の炭化物は、W-101西辺の内側で検出された炭化物を想起させるもので、本土坑が1号周溝状遺構の一部であった根拠になるだろう。その場合、1号周溝状遺構は焼失家屋であったと考えられる。

D-1011は建物遺構群の北方に離れた場所にあり、旧河道由来の谷地に向かって下がり始める場所に位置する。3号井戸跡(D-1023)は北に3mと近い。平面円形で口径1.0m、深さは0.9mの円筒状を呈する。覆土は自然堆積でC混黒色粘質土、中位に炭化物を多く含む。出土遺物は土器細片が少量あるが、図示には至らなかった。調査時に井戸跡と同じような湧水があったので、小規模な井戸ないしは水溜め的機能を想定しておきたい。

D. 溝跡 (Fig.7・27)

古墳時代前期に属する単独の溝跡としては、W-108・109・110・119・120・121・123・124がある。これらは溝状の遺構を一括したため、推定される機能や性格は一様でない。以下、遺構毎に説明していく。

W-108はC-5(5号周溝状遺構)のW-112からC-4(4号周溝状遺構)南東を迂回するように廻ってC-4の南西でW-109に合流する。途中、C-3に切られている。底面は凹凸があり、勾配は緩いが北東から南西、覆土はC混黒色土で水流の痕跡は認められない。C-4南東辺と一定の幅をおいて平行する状況からは、同時存在であった可能性が高い。出土遺物は土器細片のみで、図示には至らなかった。

W-109は西北から南東方向の直線的ラインである。途中でW-108、南東端はC-2(2号周溝状遺構)W-103へ合流している。途中に2号井戸跡としたD-1019があり、土壠断面では一体の遺構と思われる。また、井戸を含む倒木痕付近で本溝跡の平面プランは屈曲しており、倒木に伴う隆起を迂回した結果とも推定される(倒木の時期は古墳時代前期の範疇)。底面は工具痕とも思われる凹凸を残し、勾配は緩いが南東から北西、覆土はC混黒色土で水流の痕跡は無い。W-108との関係は覆土も薄く判然としないが、一体で機能していた段階と、本溝跡のみで機能する段階を想定できる。また、W-108と共に底面に掘削工具痕を遺す点から開渠であったのか疑わしく、暗渠排水のような性格も想定できよう。遺物は土器細片が少量出土したが、図示には至らなかった。

W-110はC-1(1号周溝状遺構)内側にある幅20cm程度の小溝で、位置関係からして周溝状遺構内側の建物に伴う壁周溝の可能性がある。覆土はC混黒色土で、水流の痕跡は見られない。遺物は出土していない。

W-119は、C-3(3号周溝状遺構)の内側という位置関係から内側建物に伴う可能性を考えたが、倒木痕と連続する状況から、樹木の幹が倒木時に地面にめり込んだ圧痕であると判断した。出土遺物は無い。

W-120は2号井戸の北、W-109が屈曲する部分に接続しており、W-1002に分断されている。覆土はC混黒色粘質土で、水流の痕跡は見られない。遺物はS字甕・元屋敷系高环が出土したが、細片で図示に至らなかった。

性格については判然としないが、倒木痕の輪郭部分に相当するので、倒木時の地割れや陥没に由来するものと考えておきたい。從って出土遺物は立木周辺の土器が混入した結果と理解できる。

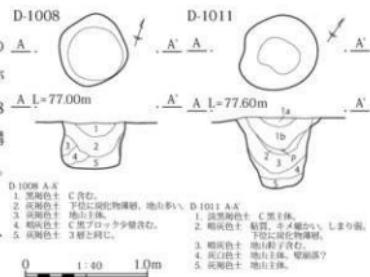


Fig. 26 古墳前期の土坑

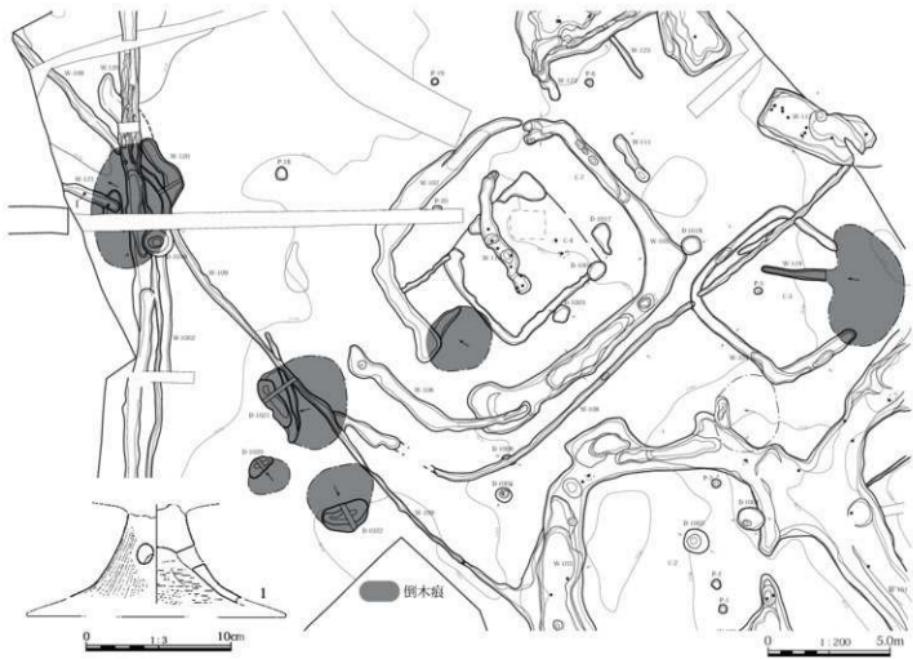


Fig. 27 W-108・109・119～123・倒木痕とW-121出土遺物

W-121は2号井戸の北西、倒木痕に接続している。W-119同様、倒木時の幹圧痕と判断される。遺物を含んでおり、先のW-120と同じ来歴を想像させる。出土遺物としては、高坏の脚部を図示した(Fig.27・Tab.8)。

W-123はC-9(号周溝状造構)の内部にあり、切り合い関係では本溝跡の方が古い。浅いうえに出土遺物も無く詳細は不明だが、3・4・7・8周溝状造構と同一軸なので、これら建物跡に関係することは確かだろう。

W-124はC-6(号周溝状造構)W-116の西側にあり、接続している。切り合い関係は不明である。浅いうえに出土遺物も無く、その性格については不明である。

W-125は造構群の西方50mから検出した。時間の制約からプランと一部断面の観察に止まったが、南北に蛇行し、覆土にはAs-Cを含む。自然流路に手を入れた水路と思われる。出土遺物は無かった。

E. 造構外出土遺物 (Fig.25・観察表無し)

7は砥石である。第2面の調査完了写真を撮影するために排土山へ登った際、採集された。従って出土位置については全くわからないが、採集した排土山は周溝状造構を掘り下げた時の発生土なので、古墳前期であることは間違いないだろう。水成岩の砥石で、おそらく半分を欠損している。各面は良く研磨されており、大きい面は使用によって皿状に窪んでいる。置砥と思われ、最大幅は約11cm、厚さ5cm、残存長13cm、重量は1,150g。

Tab. 8 井戸跡・溝跡出土遺物観察表

図 遺号	出土位置	種別	距離	口徑	底径	高さ	出土の特徴	測定値	口徑・底径の()は推定値	高さの()は残存値	調査	性・色	備考	
fig.25. 1	1号井戸 D-1015	土壌層	直	15.3	5.0	25.5	縫隙粘合み赤鉄色目立つ	外/ロナデハケ内ナデハケ 内/ロカケ壁ヘナダ	直・高灰	ほぼ完形(口縫隙微 摩耗面有)	手すきスラ付壁 内斜面有			
fig.25. 2	1号井戸 D-1015	土壌層	右付壁	19.8			縫隙粘合多くやわらかく	外/ロナデハケ 内/ロナデハケ	直・該廻外見端	残 30% 壁に目次大、内11次スラ付	手こねれ壁、内斜下ヨガ			
fig.25. 3	2号井戸 D-1019	土壌層	道付	(0.5)			(2.1) 縫隙粘合多くやわらかく	外/ロナデハケ内ナデハケ	内/ロナデハケナデ		直	直灰	直	
fig.25. 4	2号井戸 D-1019	土壌層	直	5.2	6.0	砂利含み赤鉄色多い	外/ロナデハケ内/ロナデハケ	内/ロナデハケ	直・該廻	内 30% 制限焼成度2等	直	直灰		
fig.25. 5	2号井戸 D-1019	土壌層	直	(15.0)	(5.6)	砂利多量赤鉄色目立つ	外/ロナデハケ内/ロナデハケ	内/ロナデハケ	直・該廻	直 30% 褐化濃い	直	直灰		
fig.25. 6	2号井戸 D-1019	土壌層	裏	(21.0)	0.7	砂利・赤鉄色多い	外/ロナデハケ内/ロナデハケ	内/ロナデハケ	直・該廻	直 30% 褐化濃い	直	直灰		
fig.27. 1	w-121	土壌層	高杯		6.03	砂利多く赤鉄色粘少	外/側外ミガキ 内/側内イカナダ	外/側外ミガキ 内/側内イカナダ	直・該廻	内 20% スカラシ方向				

3. 古墳時代後期の遺構と遺物

該期の遺構として判断されたのは、土坑3基と水田跡である。遺物は土坑以外に前期の周溝状遺構の周溝上層からも出土しているが、これらについては遺構の埋没時期を示すものと考え、既に前節で報告したところである。

a. 土坑 (Fig.29)

該期の土坑は古墳時代前期の周溝状遺構群の範囲内に分布している。時期判定の根拠としては、第一に出土遺物であるが、覆土中に Hr-FA の一次堆積層ないしは混入土が認められる点も評価対象とした。

D-1001 は2号周溝状遺構内側に位置し、D-1002 が西に近い。

平面形状は楕円形で長径 1.1m、深さ 0.38m の浅い漏斗状を示す。

覆土には Hr-FA の一次堆積層を認めるが、それを抜いて再掘削した形跡がある。出土遺物として覆土中出土した土器片 1 点を図示した (Fig.29-1・Tab.9)。典型的な内斜口縁環である。

D-1002 は2号周溝状遺構内側に位置し、D-1001 が東にある。

平面形状は円形で径 1.1m、深さ 0.4m の浅い漏斗状で D-1001 と同じ形態である。覆土は Hr-FA 混入土の自然堆積である。出土遺物は無いが、遺構の形状から該期とした。

D-1006 は4号周溝状遺構の南側、W-108 と重複してこれを切っている。平面楕円形で、長径 0.6m、深さ 0.1m と小さい。Hr-FA の一次堆積層が覆土上位にある。出土遺物は無い。

D-1007 は6号周溝状遺構の W-116 と重複し、これを切る。平面円形で口径 0.7m、深さ 0.15m の皿状である。覆土は自然堆積で、Hr-FA は含まれていない。出土遺物は覆土中出土した土器片 1 点を図示した (Fig.29-2・Tab.9)。内斜口縁の环で、粗製品である。

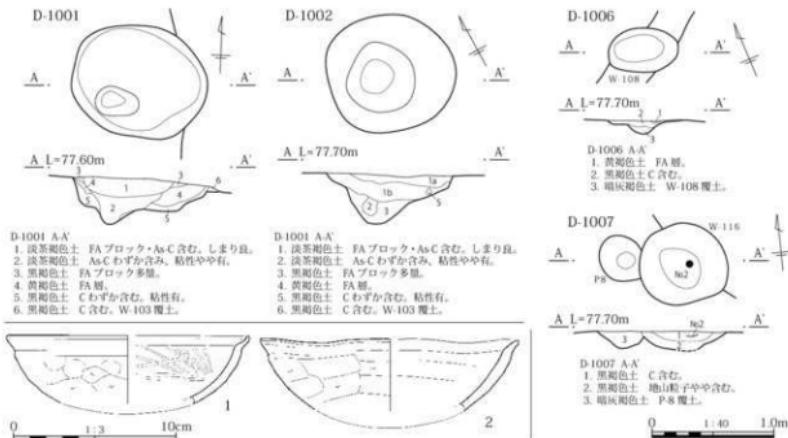
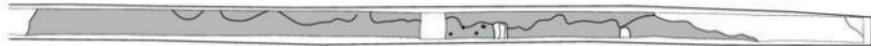


Fig. 29 古墳時代後期の土坑と出土遺物

Tab. 9 古墳時代後期土坑出土遺物観察表

No.	遺構名	出土物	種別	断面	口径	底径	高さ	数値はcm		口径・底径の()は推定値	高さの()は残存値
								測定	底面		
fig.29-1	D-1001	土器片	縁環	井	(15.0)	14.2	11.0	11.0	11.0	外ノリナマケアリ 内ノリナマケアリ	自・須無
fig.29-2	D-1007	土器片	井	(16.0)	14.4	10.0	11.0	11.0	11.0	外ノリナマケアリ 内ノリナマケアリ	自・須無



※北1トレンチでは Hr-FA の一次堆積層を確認したが、その直下が水

田であったか否かは判然としなかった。

北1トレンチ



L=78.00m

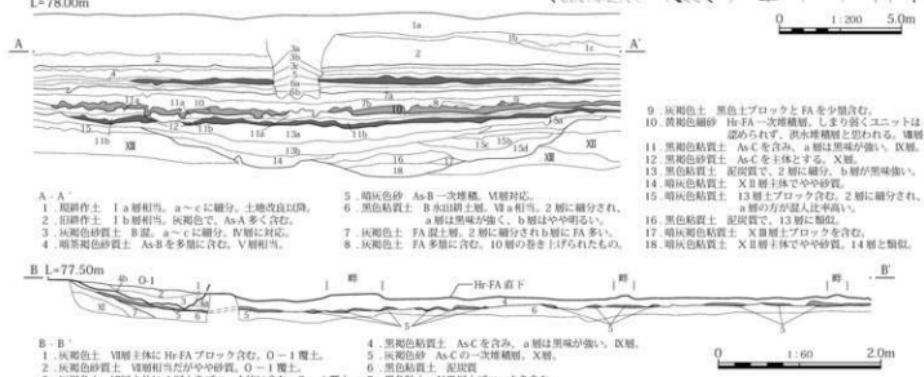


Fig. 30 古墳時代～奈良・平安時代の水田跡

4. 奈良・平安時代の遺構と遺物

該期の遺構として判断されたのは、溜井状土坑1基と溝跡3条と落ち込み状遺構2ヶ所、小穴1ヶ所である。これらは出土遺物から判断しているが、第2面の時期不明な土坑や小穴の一部は該期の可能性がある。

a. 溜井状土坑 (Fig.32)

1基のみの検出である。古墳時代前期の5号周溝状遺構のW-114西半と重複しており、自然堤防状の微高地が旧河道へ向かって下がる場所である。調査時の不備で重複するW-114東半との重複状況は判然とせず、平面格円形の溜井部の東にスロープが取り付くような形状に掘り上がった。しかしW-114東半は、土層を見る限りでは周溝状遺構と判断する方が相応しいので、本来は溜井部のみであったと思われる。溜井部は浅い漏斗状で、南寄り湧水部を最深にその周囲へテラス状の平坦面が巡る。テラス部分には湧水部へ降るステップ状の浅い窪みが直列に3ヶ所、単独の窪みが1ヶ所ある。長径3.4m、深さは確認面から最大0.85mである。湧水部の内部は拳から人頭大の川原石や前橋泥流中の亜角砾、須恵器破片が詰まった集石状をなしており、底面は礫の多い前橋泥流(埴層)に達し、湧水期である調査中の5月でも水が滲み出す状況であった。覆土は暗灰色粘質土の自然堆積で、上位は平安末の水田耕作土に覆われている。遺物は湧水部の集石に混ざって須恵器環、覆土中から土師器環、他に混入の古式土師器片がある。出土遺物としては3点を示した(Fig.34-1～3・Tab.10)。1は須恵器環で底部は回転ヘラケズリ、2・3は土師器環で小片からの図上復元で不安はあるが、2が北武藏型、3は続比企型的で、8世紀中葉～後半と思われる。

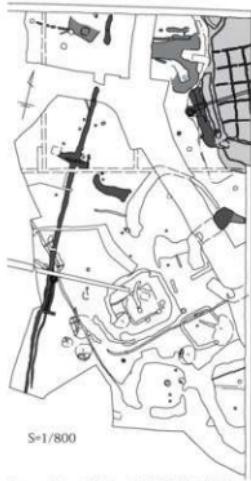
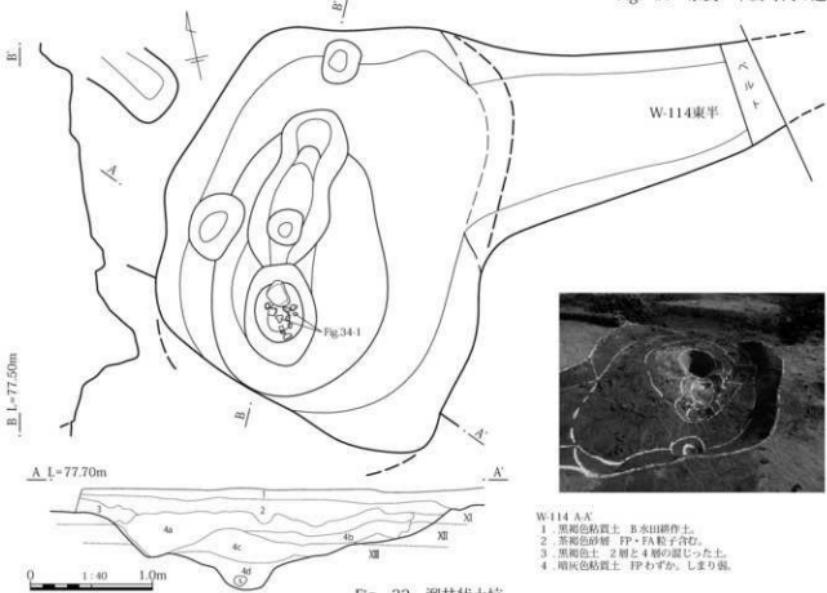


Fig. 31 奈良・平安時代の遺構





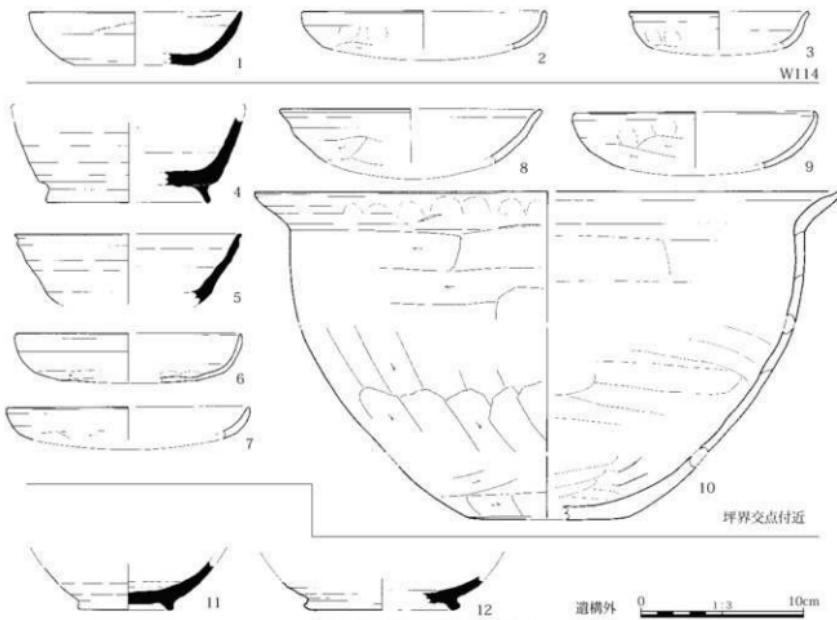


Fig. 34 奈良・平安時代の遺物

Tab. 10 奈良・平安時代遺物観察表

数値はcm 口径・底径の()は推定値 高さの()は残存値

図 番号	出土位置	地質	形態	寸法	底径	高さ	筆者	地・色	備考	
fig.34-1	湖田灰土层中葉頃	湖田層	环	11.3(?)	17.3(?)	3.3(?)	新井や多 白色粘子少額	外/ロクロミズキモロコシカ 内/ロクロミズキモロ	良・灰 灰・灰	
fig.34-2	湖田灰土层一様	湖田層	环	15.0(?)	23.0(?)	3.3(?)	湖田和わずか	外/ロクロミズキモロコシカ 内/ナデ	良・灰 良・灰	
fig.34-3	湖田灰土层一様	湖田層	环	11.0(?)	23.0(?)	湖田和やや多い	外/ロクロミズキモロコシカ 内/ナデ	良・灰 良・灰	小破片	
fig.34-4	坪交合付近上	土師器層	环	10.0(?)	15.2(?)	湖田和わずか	外/ロクロミズキモロコシカ 内/ロクロミズキモ	良・灰 良・灰	外側黒斑	
fig.34-5	坪交合付近w-1002	土師器層	环	14.0(?)	14.3(?)	白色粘子多い	外/ロクロミズキモロコシカ 内/ロクロミズキモ	良・灰 良・灰	湖田 湖田付 湖田草	
fig.34-6	坪交合付近w-11	土師器層	环	11.0(?)	13.0(?)	湖田和やや多い	外/ロクロミズキモロコシカ 内/ナデ	良・灰 良・灰	湖田 湖田付 湖田草	
fig.34-7	坪交合付近w-1002	土師器層	环	15.0(?)	22.0(?)	湖田和やや多い	外/ロクロミズキモロコシカ 内/ナデ	良・灰 良・灰	湖田 湖田付 湖田草	
fig.34-8	坪交合付近w-1002	土師器層	环	16.0(?)	21.0(?)	湖田和わずか	外/ロクロミズキモロコシカ 内/ナデ	良・灰 良・灰	湖田 湖田付	
fig.34-9	坪交合付近w-1002	土師器層	环	15.0(?)	23.4(?)	湖田和やや多い	外/ロクロミズキモロコシカ 内/ナデ	良・灰 良・灰	湖田 湖田付	
fig.34-10	坪交合付近w-1002	土師器層	环	16.0(?)	21.0(?)	20.2(?)	湖田和・縁 赤褐色目つづ 外/ロクロミズキモロコシカ 内/ロクロミズキモロコシカ	外/ロクロミズキモロコシカ 内/ロクロミズキモロコシカ	良・灰 良・灰	湖田 湖田付 湖田草
fig.34-11	湖升付付近付近	湖田層	环	5.9	7.8(?)	湖田和や多	外/ロクロミズキモロコシカ 内/ロクロミズキモロコシカ	外/ロクロミズキモロコシカ 内/ロクロミズキモロコシカ	良・灰 良・灰	湖田 湖田付 湖田草
fig.34-12	PA 本川付近	湖田層	付属環	9.6	21.1	湖田和わずか	外/ロクロミズキモロコシカ 内/ロクロミズキモロコシカ	外/ロクロミズキモロコシカ 内/ロクロミズキモロコシカ	良・灰 良・灰	湖田 湖田付

からの図上復元で厳しい部分もあるが、時期を示す資料と考え掲載した。9の土師器環は8世紀の中葉頃、その他の土師器・須恵器の环は8世紀後半の範疇と思われる。10の土師器鉢は古墳時代後期に多い器種であるが、接合率の高さや胎土・焼成の特徴からは共伴すると考えられる。

W-1003はW-1002に対して斜方向で合流するもので、覆土の特徴はW-1002で一般的な黒色粘質土であるが、遺物を伴わない為に明確な時期は不明である。その機能についても、不明とせざるを得ない。

C. 落ち込み状遺構 (Fig. 7)

2か所検出された。共に浅くて短い溝状で、O-1は地形に、O-2は条里地割に沿う。覆土は黒褐色で底面はやや凹凸があり、土師器・須恵器の破片を含むが小破片で図示には至らなかった。耕作に伴うものと推定される。

D. 小穴 (Fig. 7・33)

遺物の出土をもって1基を該期と判定した。坪界交点付近O-2に近いP-11がそれで、柱穴とするには浅い。耕作痕とも思われる。遺物は土師器環があり、坪界交点付近出土として掲載した。(Fig.34-6・Tab.10)。

5. 平安時代末の遺構

該期の遺構は、1108年の浅間山噴火による火山灰(As-B)を除去した面が遺構面となる(1面目)。調査区の過半から畦畔と田面が検出された。また、道路とした溝状の窪みも7条検出された。

遺物は全て下層から浮いたもので、該期と判断されるものは無い。

a. 水田跡 (Fig.35 ~ 41)

該期の水田跡は微高地部分の一部を除き、As-Bの一次堆積層直下で確認されたもので、その区画はいわゆる条里型である。畦畔の中には幅50cm以上の大畦畔が東西と南北の2条あり、上面を後世に削られ高さは僅かだが、東西大畦畔ではこれに沿って後述する道が形成され識別は容易であった。なお、既に前節で触れたが南北大畦畔の直下には区画溝であるW-1002があり、坪界表示として正に表裏一体のものと推察されるが、土層断面(Fig.24・2号井戸)では相互の関係は不鮮明であった。大畦畔は中央調査区北東寄りでほぼ直角のL字型となり、北と東の畦畔は不鮮明だが、状況的には坪界交点として良い。便宜上、北西から時計回りに坪A～Dと呼称し説明していきたい。

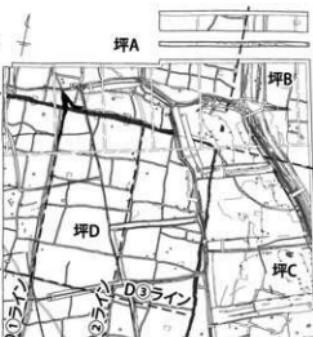


Fig. 35 平安時代末の水田区画名

坪A 北と西が調査区外となり、平面で調査したのは約1,050m²、1坪の1割にも満たない。中近世溝の破壊も多いが、As-Bの堆積は厚く保護されていた。北東半が谷地、その南に微高地、それ以外が後背湿地に相当する。小畦畔は谷地部分では低く不鮮明、後背湿地部分では総じて高く明瞭、微高地部分では本体は失われシルエットのみであった。区画は谷地部分で35m平均の長方形による整然とした区画を志向していたようだが、後背湿地部分では地形に沿って弧を描く部分もある。田面の状態も地形に対応するようで、谷地部分では踏み跡状の凹凸が顕著だが、後背湿地部分では凹凸が少ない。調査時の感触では、下位の土質に左右された結果と思われた。

坪B 北と東の大半が調査区外で、坪Aの半分程である。やはり後世の溝による破壊が多いが、As-Bの堆積は坪Aに増して厚い。南西が微高地だがそれ以外は谷地で、谷地部分では凹凸激しい田面?を捉えたが、畦畔はあっても低く不鮮明、畦畔が確認できない場所もあった。なお、微高地部分では水田跡を検出できなかった。

坪C 東と南が調査区外となる。大半が微高地で、As-Bの堆積は薄いえに中世の雑草と馬蹄痕の影響を受けしており判然としない。南半ではAs-Bが比較的残っていたが、水田の残存状態は悪く、小畦畔も不鮮明である。区画は条里に則った長方形を基本とするようだが、一部地形に沿って斜行するものもある。

坪D 南と西が調査区外であるが約4,300m²、1坪の4割弱を調査した。中近世溝の破壊はさほど目立たず、北東隅が微高地となるが、他は後背湿地でAs-Bの堆積も厚く、保存状態は良い。小畦畔も高く明瞭なものが主体であるが、不鮮明で途切れるものもある。区画は一部蛇行するものもあるが方形基調で、150m程度を平均に細小で10m以下、最大で250mである。アミダクジ状の配置であるが、筋の通る畦畔もあり(Fig.35のD①～③)、「半折型」的に坪内を区画する際の基準であろうか。田面は凹凸が少ない平坦なもので、As-B降下時に耕作されていた雰囲気は無い。水口は基本北西側に多いが、大畦畔沿いではそれと接する側に設けられていた。

標石 単独・複数あわせて26箇所を確認した。東西南北の大畦畔上とその付近、D①ライン付近に集中する傾向があり、水田区画の目印とされた可能性がある。河原石主体だが、一部に前橋泥流中由来のものもある。

b. 道跡 (Fig.36 ~ 41)

水田と共に検出された、水流痕の無い溝状の窪み7条を道跡と判断した。その部分のAs-B一次堆積層は厚くなつており、少なくとも後世の沈下では無い。畦畔との重複部分では、上から踏まれた雰囲気で畦畔は形を保っており、道の形成が水田跡以降As-B直前であることがわかる。1・2号道跡のように畦畔に沿う場合もあるが、地形に準じて斜行する場合もあり、あるいは耕作放棄地を横切って耕作地へ往来する道であった可能性がある。

6. 中・近世の遺構 (Fig.36 ~ 41)

- a. 溝跡 19 条を検出した。W-1 b と W-2 b は中世後半、その他は近世～現代で、地形に沿って開鑿された水路と考えられる。中近世の在地土器や陶磁器を主体に土師器・須恵器の破片、板碑片や馬齒、石鐵も出土している。
- b. 土坑 162 基を検出した。覆土の状態から大半が中世の耕作痕と思われるが、円形のしっかりした穴もある。農耕関係と思われるが、時間的な制約から該期の水田跡は調査していないので、具体的な関係は不明である。
- c. 段切り状遺構 7か所を検出した。水路と推定される溝が接続する点、疑似畦畔状の高まりをもつ 1 号段切等から、水田跡と思われる。土地改良前の地形図に残り、一部は現代まで機能したことは明らかだが、Ⅲ層由來の覆土もあり、大半は中世末までに開鑿されていたようである。後述の馬蹄痕が肩に残る場合がある。
- d. 掘立柱建物跡 微高地の南端で 1 棟を検出した (B-1)。側柱建物で、北壁は柱穴が無く解放する構造が推定される。V 層主体の覆土から中世と判断され、北側の柵列や窪地状遺構、馬蹄痕と関連する建物の可能性がある。
- e. 柵列 掘立柱建物の北側、南北に概ね等間隔で並ぶ小穴 4 ケ所 (D-54・55・56・57) を柵列とした。小穴の覆土は V 層主体、やや千鳥状で直線とならないが、W-1 に沿う点から一体をなす構造物であった可能性がある。
- f. 窄地状遺構 微高地上に 6 ケ所を検出。凹凸が激しく、中世末頃の洪水層が隙間に入り込む。後述の馬蹄痕が残されている場合が多いが、それを鋤痕が切る部分もあり、撒削と放牧を繰り返した雰囲気である。下層の遺物が浮き上がりており、古墳前期の土師器小破片と石鐵 1 点が出土している。

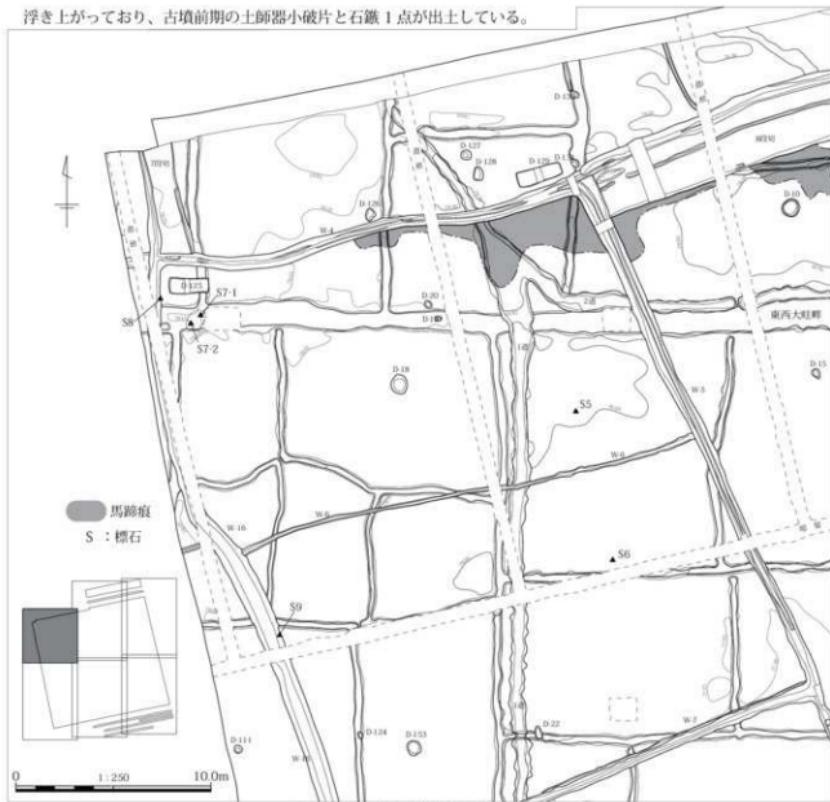
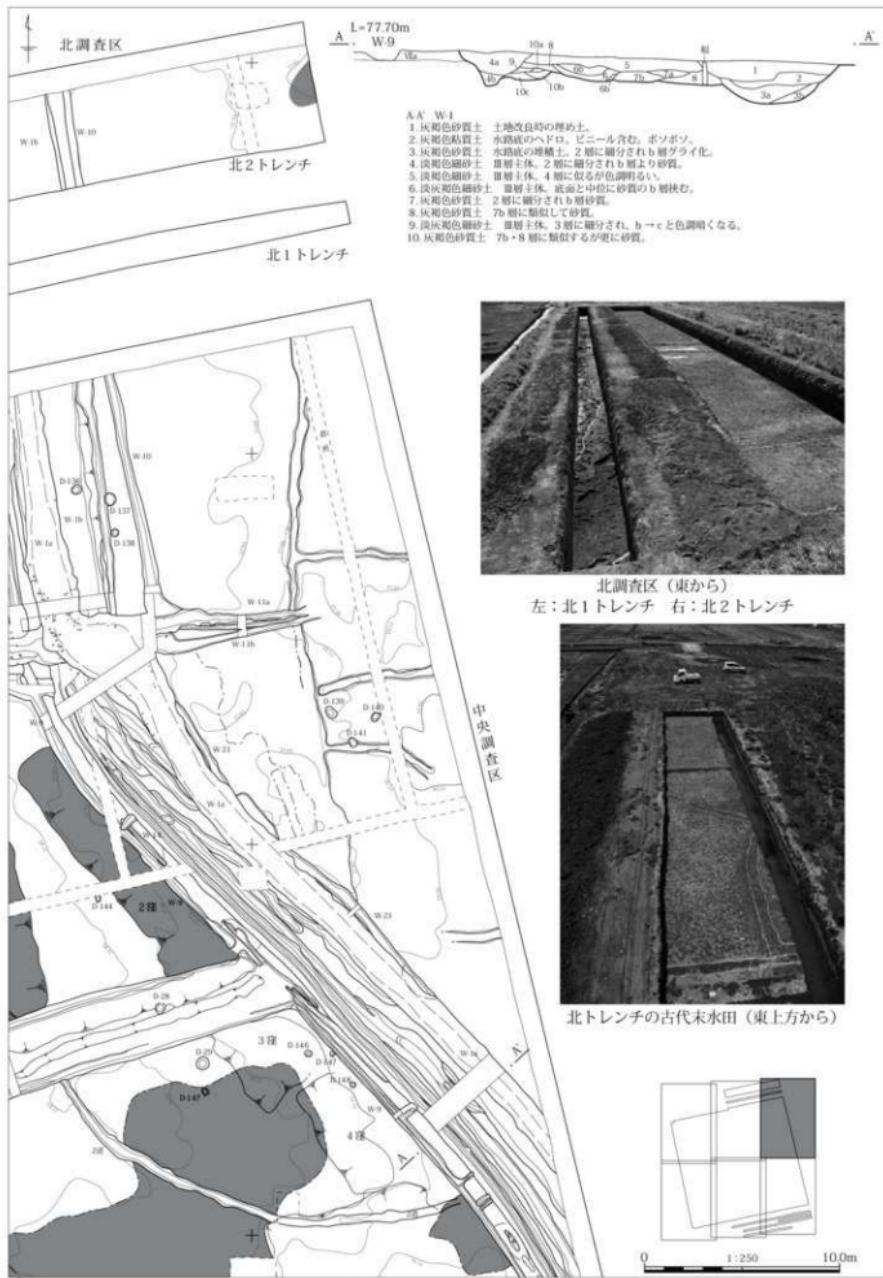




Fig. 37 平安時代以降の遺構 (2)



g. 馬蹄痕 微高地上の窪地状遺構や、溝跡・段切り状遺構に接する場所に確認され、本来は全域に広がっていたものと思われる。特に微高地のそれは、洪水層であるⅢ b 層を捏ねるように何度も踏み込んでいる。野良状態で徘徊する馬が残したとするにはやや密度が高過ぎて、一定の囲みの中に放牧されたような景観が想定されよう。窪地状遺構における掘削痕との重複は、馬の好む「みた場」を人が手をかけて維持していたことを窺わせる。

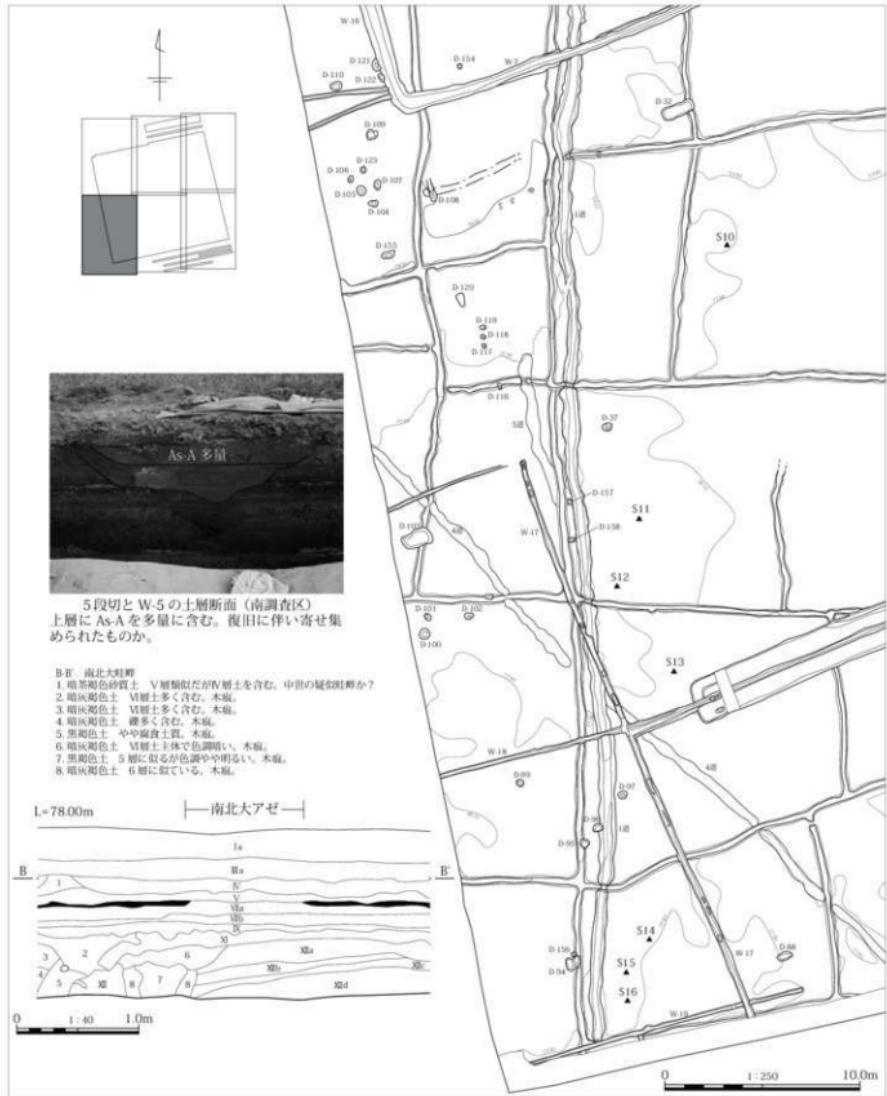


Fig. 39 平安時代以降の遺構 (4)



Fig. 40 平安時代以降の遺構（5）

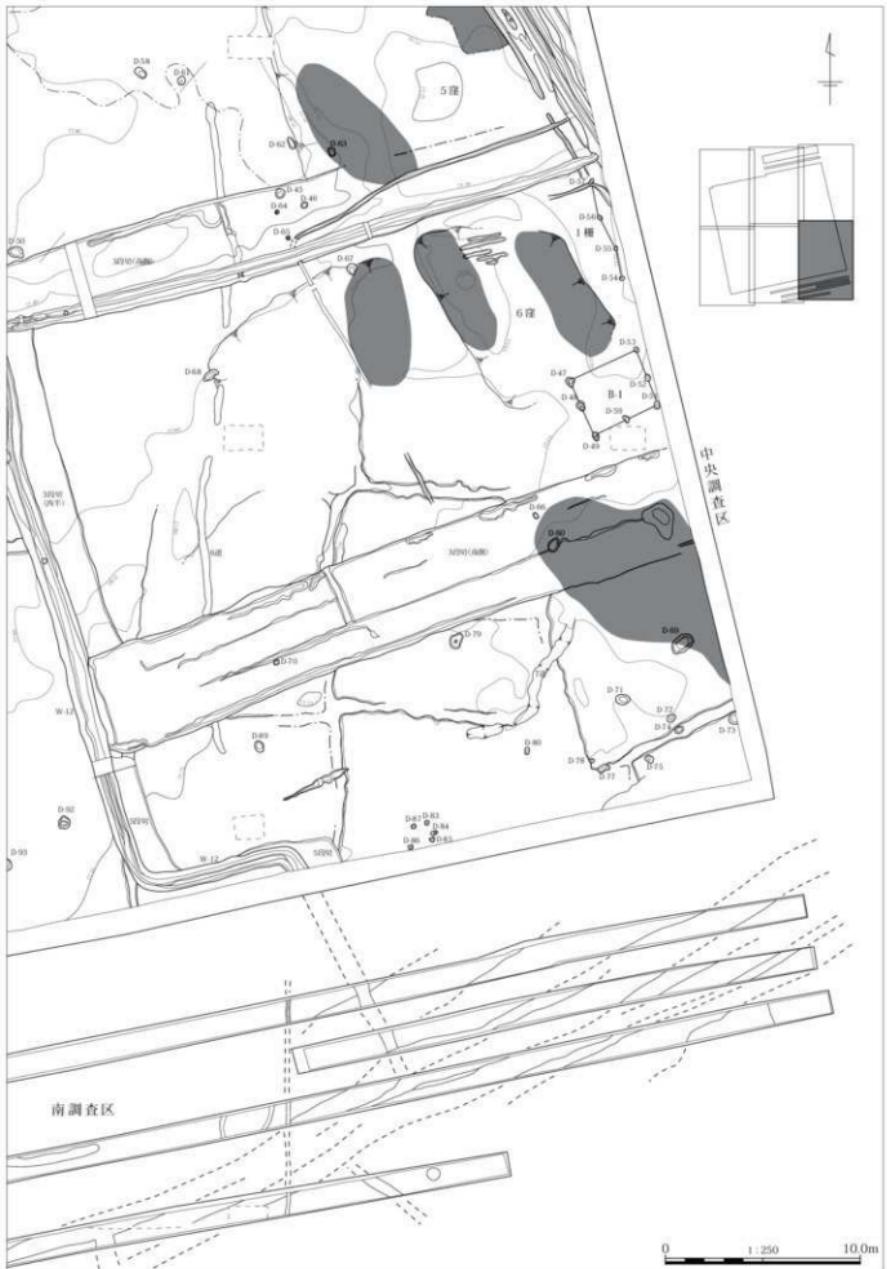


Fig. 41 平安時代以降の遺構 (4)

VI 総括

はじめに

南部拠点地区遺跡群No.11の発掘調査では、古墳時代前期集落、古墳時代後期～近世に至るまでの水田関係遺構が検出され、前橋台地南部における土地利用の変遷を考えるうえで重要な成果を多く得た。予想外とも言い得る状況から報告書の紙面も足りず、充分な事実記載が果たせたのか一抹の不安が残る。本章では調査のハイライトであった古墳時代前期と奈良・平安時代の遺構遺物を中心に補足説明と簡単な検討を加え、総括に変えたい。

1. 古墳時代前期の遺構群について

今回の調査を最も特徴づける遺構群である。ここでは代表的な出土土器から遺構の年代を求めたうえで遺構群の推移を整理し、個別の遺構について検討を行う中でその性格に接近を試みたい。

a. 出土土器の特徴と年代観 出土した土器はいわゆる石田川式（尾崎・松島ほか 1968）で、上野地域では一般的なS字甕や高坏・器台・壺・塙等があり、通常の集落遺跡と比べて何ら遜色の無い、埴輪を思わせる要素の無いものである。以下、遺構群の年代観を導く作業として、代表的な土器群を取り上げてみたい。

1号周溝状遺構出土の土器群 Fig.10・11に19点を国示したが、内4点は古墳後期の混入である。高坏（2・3）は柱状脚で、布留式の影響で前期末に出現する形態である。塙（6）は直口壺的な形態で、中期和泉式に近い雰囲気である。台付甕（14）はく字状口縁の甕で、南関東地方の五領式新段階に多いタイプだが、重たいまでに器壁が厚く、S字甕（11）と共に伴するならば質賃なものである。石田川式という薄甕文化の成熟した上野地域において、その枠組みの弛緩すら感じる。新しい段階のものと理解しておきたい。

6号周溝状遺構出土の土器群 Fig.20・21に22点を国示した。高坏（3～9）のうち、3～5の3点は短脚の椀形高坏で、廻間式（赤塚 1990）の古段階に多いものである。7は有稜で外反する特異なプロポーションで、東海西部の弥生時代後期山中式風だが、北陸地方の影響下にあるものだろう。9は椀形高坏と考えられるが、脚部上位の横位平行沈線が特徴的で、東海地方西部の弥生土器の残像かと思われる。壺（13）はいわゆるパレススタイルの加飾壺の口縁部で、内面の矢羽状文様が三段で突帯も明瞭である点からは、廻間I式でも新しい段階の特徴と考えられる。搬入品の可能性は杞憂であろうが、乳白色の胎土焼成と映える赤彩は故地の雰囲気を多分に漂わせる。S字甕（16～19）はさほどS字状とならない直口壺風だが、口縁端部内面の面取り、頸部内側のハケ、16・17のような肩部横線のあり方からは古様である。17外面のハケは上野地域では稀な粗いものだが、むしろそれは故地の雰囲気に近い印象を受ける。16は廻間II式4段階の標式とされた愛知県清洲市廻間遺跡SK-30出土品と類似、23は脚部の接合技法が故地のそれに酷似しているが、共に胎土は在地である（赤塚次郎氏のご教示）。反面、21の台部はS字甕B類以降の約束事とも言える端部内面の折返しが無く、そうした土器が製作されてしまう背景を思うに興味深い。石田川式のS字甕が成立する前夜の様相として理解されよう。

土器の年代観 今回出土した土器のうち、結論から言えば6号周溝状遺構出土の土器群が最も古く、パレス壺や短脚の椀形高坏、平行沈線の有稜高坏が廻間I式新段階、頸部内側にハケのあるS字甕は廻間II式新段階の特徴を有する。しかし明らかな搬入品は認められず、在地での模倣品であることを

勘案すれば、廻間II式未段階が妥当だろう。これは群馬南部編年（若狭・深澤 2005）の古段階に相当し、当該遺構覆土にAs-C一次堆積層が無い点（As-Cの降下は廻間II期の中ごろ、S字B類段階、坂口 2010）から、前期古段階でも新しい時期を想定できる。深澤敦仁氏による併行関係案を参考とすれば、6号周溝状遺構には3世紀末の年代が与えられる。ちなみに4号周溝状遺構は、S字甕の特徴から6号に続く時期で、3号はさらにその後と考えられる。一方で

Tab. 11 編年対応（案）

群馬南部 (若狭・深澤 2005)	尾張 (赤塚 1990)	歴年
古段階 (As-C 降下)	廻間II	300
中段階	廻間III	
新段階	松河戸I	400

※深澤 2008 をもとに作成

最も新しい様相を示すのは1号周溝状遺構の土器群で、柱状脚の高环や和泉式に近い形態の壇・く字口縁で厚手の台付甕から、群馬南部編年新段階、4世紀後半と考えられる。なお、2・5号周溝状遺構は、高环・壇・S字甕の形態から見れば1号よりやや古い時期と思われる。以上土器の検討から、本遺跡の古墳時代前期遺構群は3世紀後半から4世紀後半に至るまで、約1世紀の間に形成されたものと結論づけられる。

b. 遺構群の特色 前章で周溝状遺構として報告した、外周溝をもつ建物跡（文化庁2010）は本遺跡を特徴づけるもので、前節での年代観にかかる検討を踏まえれば、6号周溝状遺構を嚆矢に4号→3号→2・5号を経て最後に1号という変遷が組み立てられる。時期を推し量る遺物が少なかった7～9号については、特に7・8号は位置関係から4号の建て替えの可能性が高く、3・2・5号と同じ時期と思われる。他に井戸跡や排水を意図したと思われる溝跡、倒木痕も注目される。以下、遺構毎に検討を進めていきたい。

外周溝をもつ建物跡 今回の調査では9棟を確認したが、建物構造が窺えるのは4号周溝状遺構（建物跡）だけである。ここでは4号を一つのモデルと仮定し、少しばかりの検討を加えておきたい。

4号周溝状遺構は概略10m四方に周溝が巡るが、内側には5m四方の建物部分を示す溝状ホリカタが残り、内側には床直と思しき遺物もあった。旧地表面も勘案すると、ごく浅い豊穴部の周りに羽目板等による立壁が、その外側に外周溝排土による周堤帯が巡ると推定される。ほぼ平地式の建物で、史学に名高い静岡県登呂遺跡のような「床面を掘り下げない豊穴状建物」（文化庁2010）である。

羽目板の据え跡と思しき溝状ホリカタ部分と外周溝は小溝で連結され、前章で排水溝としたが、底面に工具痕が風化せず残り、周堤帯を勘案すれば、暗渠排水での蓋然性が高い。

また、柱穴が無い点の解釈として、床面へ直に礎板を置いた据え柱であったと考えている。外周溝を廻らすほどに湿润な環境であつたならば、柱材の腐朽を回避するという点でも合理的だろう。

井戸跡 外周溝をもつ建物跡と共に特徴的な遺構である。3基の井戸跡は、各々異なる微地形下に開鑿されたものであるが、建物域の外縁という点では共通するものである。建物跡との時間的な関係は不明であるが、3号井戸跡は上層にHr-FA一次堆積層があり、最後まで窪地として残っていたことを鑑みれば、最も新しい可能性を考えられる。1号井戸跡は覆土下層から完形の壺が出土したが、釣瓶として使用したような痕跡が明瞭なので、井戸封じの儀礼に伴うものではなさそうである。2号井戸跡はW-109と同時存在のようで、溝の底面勾配からは本井戸に水が落ちる構造で、水溜りの機能もある。3号井戸跡東側のテラス部も同様の機能が想定される。

なお、該期の井戸は関東地方では類例の少ないものであるが、本遺跡周辺の公田池尻遺跡や下阿内堀町畠遺跡では多くの報告例があり、地域的特徴なのかも知れない。県内だと太田市中溝深町遺跡の居館内部で検出された石敷を作成する事例、県外だと埼玉県比企郡川島町の富田後遺跡周辺で多数報告されており、共に外周溝をもつ建物跡が検出された遺跡である点は注意しておきたい。外周溝をもつ建物を外來要素とするのなら、井戸についても同様の理解をする必要が生じよう。ただ、既に報告されている遺跡の中に、井戸を単なる深い土坑として扱っているケースも考えられるので、類例の洗い直しを含めた積極的な検討が今後深められる必要がある（小島2012など）。

溝跡 外周溝をもつ建物跡の周囲を巡るように開鑿されており、建物跡との切り合い関係からは、時期と共に付け替えたことがわかる。溝底面には工具痕があり、暗渠排水である可能性も考えられる。2号井戸跡と連結されている点は興味深く、今のところ県下では確認されない特異なものである。

倒木痕 7ヶ所を確認しており、大半は遺構に切られているが、D-20～22、W-120・121とした遺構には前期

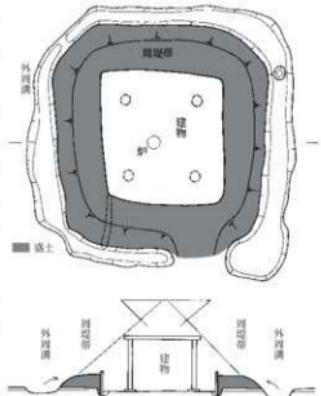


Fig. 42 外周溝をもつ建物の復元案
→4号周溝状遺構をモデルに作成

の土器が入り込んでおり、倒木の一部が集落存続期間内の出来事であったことを窺わせる。また、W-109 の 2 号井戸跡北と 3 号周溝状遺構の東隅は倒木に伴う地盤の隆起を避けたようで、遺構に切られる倒木も、実は集落の形成期ないしは直前であったことを予想させる。こうした状況は、例えば台風後にこの場所を見出しても入植したのか、それとも立木を引き倒して平地林を伐開してムラを作ったのか、様々な想像を掻き立てる。いずれにせよ、発生する木材は建物の建築材に使用されたのだろう。当該期における開発の姿を思うに興味深い現象である。

また、土器片の入り込む倒木痕も問題視され、単なる混入と見るべきでは無いのかもしれない。玉村町砂町遺跡や埼玉県本庄市塔頭遺跡では、倒木に伴う窪みからほぼ完形となる土器が複数個体出土し、樹木下での何らかの祭祀が想定されている（岩瀬 1998）。意図的に引き倒した木であれば、尚更その可能性は高いだろう。

C. 遺跡の性格 以上、駆け足ではあったが本遺跡の古墳時代前期遺構群の特徴を綴った。改めて本遺跡は、Ⅱ章の遺跡分布図を見れば明らかのように、同時代の遺跡がひしめく大規模遺跡群の一部であることがわかる。しかし本遺跡群が形成される前橋台地南部は、弥生時代から古墳時代初頭の遺跡がほとんど無い、無人に近い地であった。その中にあって本遺跡（以下 No.11）は、先で導いたように 3 世紀末という時期から、遺跡群の先駆けとなるものである。また、隣接の南部拠点地区遺跡群 No.10 では、本遺跡東側を画す谷地の対岸から、古墳時代前期の外周溝をもつ建物跡が複数検出されている。さらに南部拠点地区遺跡群 No.3 の 12 区南からも、狭小な調査区で不確定要素はあるが古墳時代前期の遺構・遺物が確認されている。右にはそれらを抜粋した位置関係図を示した（Fig.43）。それによれば、北西から南西に穏やかに蛇行する、今は西川と称する小河川の前身と思われる谷地（旧西川）があり、その両岸には小規模な建物群が 3 単位近接し、集落を形成していることが理解される。この谷地は、No.11 の所見では As-C 一次堆積層が薄く水平に認められるものの水田の存在は認め難い。しかし横手湯田遺跡 I 区では、この谷地に As-C を含む水路（8 号溝）が開削されており、As-C 降下後となる No.11 の遺構群の開始時期とほぼ同じである。さらに No.11 W-125 を、本来は旧西川へ合流していたであろう横手湯田 G 区 22 号溝から分水した水路とすると、南方の後背湿地部分には水田域も予想される。これらを前橋台地南部における開発初期の一形態と捉えるなら、公田池尻・公田東遺跡、横手早稲田・横手湯田遺跡 A・B・D 区における同時期の遺構群も、同様の性格として理解できる。これら複数の単位は、おそらく相互の結束を強め、やがて前橋台地を広大な生産基盤へと変えいった。彼らの到達した姿こそが、広瀬古墳群中の前橋八幡山や前橋天神山古墳、あるいは元島名将軍塚古墳なのだろう。

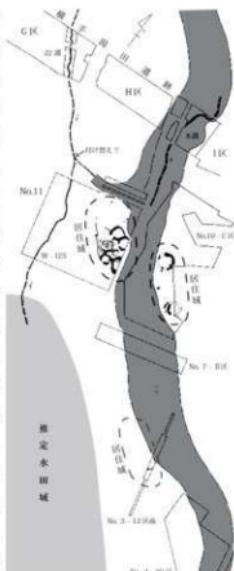


Fig. 43 旧西川と古墳時代前期の遺構分布

2. 奈良・平安時代の遺構と遺物について

遺物を出土した溝跡 今回の調査では、As-B 下水田跡大畠畔の下からその前身となる溝跡 W-1001・1002 が確認され、細片とは言えまとった土器が出土した。前章の繰り返しもあるが、Fig.34 - 4・5 の須恵器が 8 世紀後半、土器師 6・7 は 8 世紀末～9 世紀初頭、土器師 8・9 は口縁端形態を根拠に 8 世紀中葉の時期が想定される（坂口一・三浦京子両氏のご教示を得た）。土器の示す時期は即ち W-1001・1002 の時期と考えれば、条里型地割の水田は遅くとも 8 世紀中葉には施工されていたことになる。従来、前橋台地南部における条里型地割の水田は、本遺跡東方の西田遺跡における竪穴建物跡と As-B 下水田跡の重複関係を根拠とした、9 世紀後半以降の施工が定説化している（新井 2001）。一方、玉村町砂町遺跡の大畠畔からは 8 世紀後半の土器師が出土しており（中里 2000）、その

施工が遡る可能性は囁かれていた。今回の出土土器群は先の砂町遺跡の8世紀後半を遡る県内最古の資料で、関東地方における条里型水田の施工時期を考える上で今後重要な位置づけを得ていくものと考えられる。

坪界交点における遺物出土の意味 今回のW-1001・1002出土遺物は、その時期もさることながら、坪界交点付近出土という点も興味深い。环を主体に瓶と大形鉢、炭化物を伴う点からは、炊爨行為を伴う饗宴のような行為が予想される。环の時期にやや幅があることを鑑みれば、同所においてこの行為(=儀礼)が継続的に行われていたことを窺わせる。これはつまり、水田施工に伴う一回性のことではなく、たとえば毎年決まつた時期に行われるような農耕儀礼が想定される。検討の余地は多分にあるが、「田遊び」のようなイメージを描いておきたい。

溜井状土坑の性格 As-B下水田跡の下層から検出されたもので、出土遺物から8世紀中頃とすれば、条里型水田と同時存在していた可能性が高い。明瞭な導水部が認められない点や、北東側の昇降施設状のステップ状構造からは、単に井戸とすべきかも知れない。類似する遺構として隣接する横手湯田遺跡D区67号土坑があり、ほぼ同時期である(春山2002)点を勘案すれば、溜井状土坑は当地で条里型水田が施工される頃に採用された灌漑形態の一種と考えられる。具体的には入梅前の渇水時に苗代造り等に活用された、いわゆる「野井戸」(鍾方2003)のような性格が想起される。つまり溜井状土坑は水路灌漑を補完する施設であって、前橋台地上へ安定して送水可能な大規模水路が開削されると姿を消すと思われる。蛇足ではあるが、この水路としては、広瀬川からの引水施設として古代に遡ることが指摘されている1号女溝(前原・秋池・飯島2001)こそが相応しいだろう。溜井状土坑は、条里型水田の施工と大規模水路開闢の時期を暗示する、数少ない遺構として興味深い存在と言えよう。

3. その他の時期の遺構と遺物について

古墳時代後期～奈良時代の水田 前節で古墳前期の水田は認め難いとした谷地部分は、埋没による乾燥化を受け、遅くとも中期後半には開田されたようで、Hr-FA(共伴土器を根拠)洪水層によって良好な状態で埋没していた。上層にはHr-FA混入土が谷地周辺に堆積しており、条里型水田の施工まで谷津田の景観であったと思われる。

古墳時代後期の土坑と遺物 微高地の土坑4基は、Hr-FAが一次堆積するD-1001を根拠に水田と同時存在であったと考えられる。他に前期の周溝状遺構上層からも後期の土器が一定量出土した。隣接するNo.10で検出された1軒の竪穴住居を勘案すれば、水田の管理にかかる小規模な施設群をここに想定しても良いのだろう。

平安時代末の水田跡 As-B直下から検出された水田の大半は、畔を踏む道路の検出をもって耕作されていなかった。改めて周辺調査事例を見ると類似の状態が大半で、これらを全て耕作放棄地と見做すか否かは、当地に限らず県下の該期水田跡の評価に大きく関わる問題なので、慎重に検討を重ねていく必要がある。

中世の水田跡 As-B被災後、遅くとも中世後半には再び耕作される。今回は時間的制約から平面調査していないので詳細は不明だが、隣接の横手湯田遺跡を参考とすれば後背湿地・谷地部分は水田であったようだ。これに伴う水路は調査区内で多く検出されており、それによれば今回の調査地点では条里型でない、地形に沿った地割となっている。また、微高地部分には水路から導水したL字状水田(段切り状遺構)が連鎖的に設けられており、恐らくそれに囲まれる範囲は島畠(中村1014)として利用されていた可能性が考えられる。そしてこの地割は土地改良前の地形图にも認められ、現代まで継続した土地利用がなされていたことを窺わせる。

今回の調査は、市教委による精一杯の調整を経た結果とは言え、広大な面積と想定を上回る数の遺構を短期間で掘り上げた上に、限られた頁数で報告となった。結果、中・近世は概報的な扱いを余儀なくされ、報告書として不完全なことは否めない。調査中に考えたことも多いが、ここでは割愛した。後日紙面を改めて検討し、調査者の職責を全うしたいと思う。最後ではあるが、隣接するNo.10を担当された御毛野考古学研究所の井上太氏には、図面の提供や調査内容についてご教示頂いた。また、強行スケジュールに文句も言わずお付き合い頂いた作業員諸氏や関係諸氏にも頭の下がる思いである。記して御礼を申し上げ、結びとしたい。



調査区定点（4月4日）

調査区定点（4月9日）

調査区定点（4月17日）

写 真 図 版



先行トレンチを掘って層序把握



ジョレンを追いかけて移植ゴテで精査



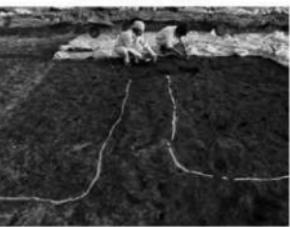
As-B 下水田面の精査



As-B 下水田の畦畔検出状況



畦畔に沿う道路の検出



耕作痕の精査



ブルーシートによる養生



第2面遺構検出状況



第2面遺構掘下げ状況



遺物取り上げ作業



終盤での遺構調査



全ての作業が終了した調査区（5月23日）



第1面調査完了時の調査区（南西上空から赤城山を望む）

周辺は北関東自動車道と前橋南インターチェンジ、今回の調査原田でもある区画整理事業によって、近年急激な変貌を遂げた。開発と引き替えに、As-Bテフラ(1108)下の水田跡を中心に広大な面積の発掘調査が行われ、条里制や農耕技術史・災害史の研究上欠かせない多くの知見が得られている。右隣は同時に実施の南部拠点地区No.10の調査区。



第1面調査完了時の調査区（東上空から望む）

左上の住宅地裏から左上に延びる緑葉は、中世末頃に前橋台地を貰いたと言われる現利根川。なお、調査区と住宅地の間を蛇行する帯は先年度実施の調査区で、手前から南部拠点地区No.7・8・9。



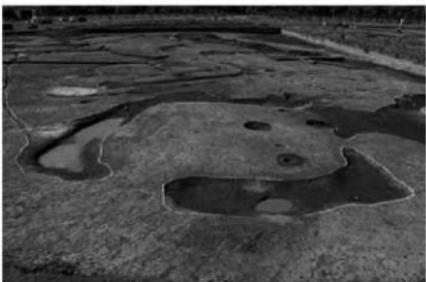
第2面 調査完了状況（北上方から）



1～3号周溝状遺構（北東から）



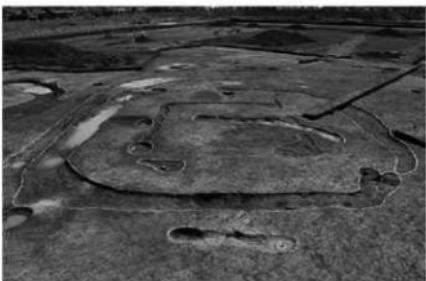
1号周溝状遺構 完掘 (南から)



2号周溝状遺構 完掘 (南から)



3号周溝状遺構 完掘 (南から)



4号周溝状遺構 完掘 (北東から)



4号周溝状遺構内の建物跡 (東から)



4号周溝状遺構と、それを迂回するW-108溝跡 (北東から)



建物跡ホリカタ底面の工具痕 (東から)



5・6号周溝状遺構（南東から）



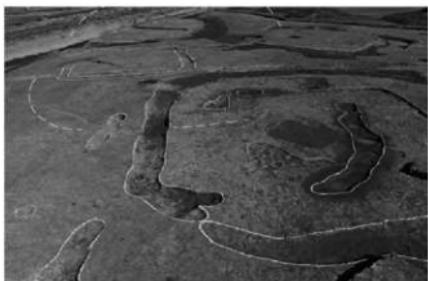
5号周溝状遺構 W-112 溝跡内の炭化物（北から）



5号周溝状遺構 W-113 溝跡内の遺物出土状況



6号周溝状遺構完掘（南東から）



7号周溝状遺構完掘（北西から）



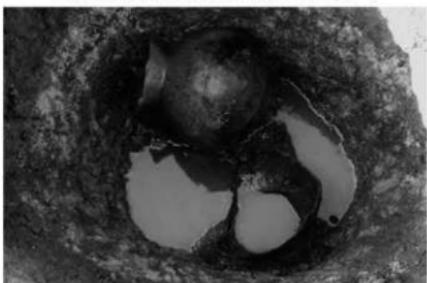
W-109 溝跡完掘（南西から）
底面には連続する工具痕



W-125 溝跡検出（北上方から）
自然流路を再掘削したものか、不規則に蛇行している



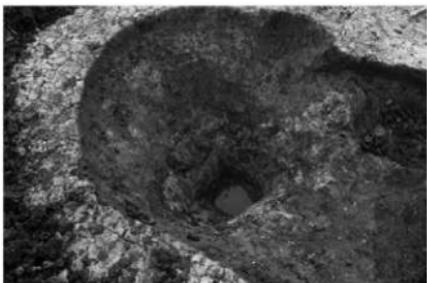
1号井戸跡（D-1015）完掘（南から）



1号井戸跡（D-1015）遺物出土状況（南から）



2号井戸跡（D-1019）完掘（南から）



3号井戸跡（D-1023）完掘（南から）



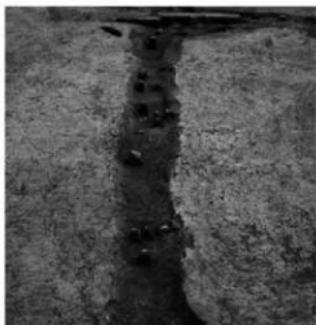
古墳時代後期の水田跡（北西上方から）
自然流路由来の畠地内に、Hr-FA の洪水刷に被覆されて残存していた



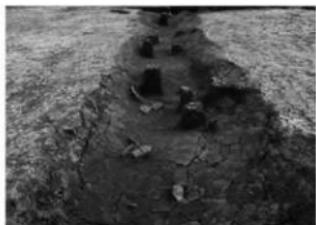
古墳時代後期 Hr-FA 下の水田跡（北から）



W-1002 溝跡完掘（南上方から）
As-B 下条里型水田の大畔群下から検出



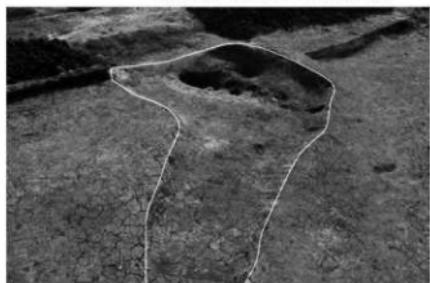
W-1002 溝跡遺物出土状況（北から）
坪界交点付近に集中



同上の詳細（北から）
土師器主体で須恵器少量、全て小破片



W-1002 溝跡坪界交点（西上方から）



溜井状土坑・W-114 溝跡完掘（東から）



同上 溝水部（北東から）



As-B 下の条里型水田跡 中世～近現代の遺構を含む（垂直・北上）



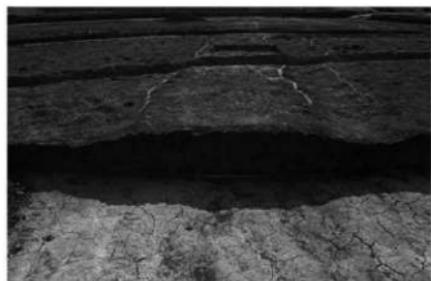
東西大畦畔と水田区画（東上空から）



東西大畦畔と、それに沿う2号道路（東から）



東西大畦畔上の遺物出土状況（東から）



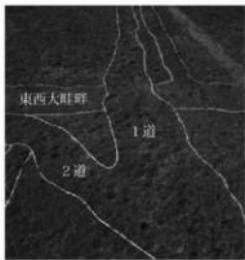
東西大畦畔の断面（東から）



南北大畦畔（南から）



南北の畦畔と、それに沿う1号道路（東から）
南北の畦畔に直行して交差する畦畔は、1号道に踏まれて潰れています。



1・2号道路の分岐（北から）
1号は東西大畦畔を踏んで横断
2号は東西大畦畔に沿う



3号道路（北西から）



2号道路東南端付近（南東から）
東西大畦畔から離れて地形に沿って蛇行



4号道路（北西から）
条里地割に斜行



水口と畦畔の一例（西から）



坪界交点近くの集石（南から）



南北大畦畔上の石（南から）

中世の馬蹄痕



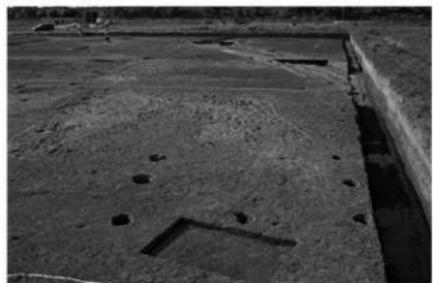
馬蹄痕の検出（北から）



無数に遺る馬蹄痕（垂直）



大畦畔上の馬蹄痕（北から）



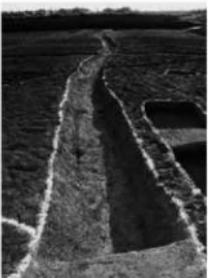
1号掘立柱建物と窪地（南から）
掘立の北側には、馬蹄痕のある窪地が1号溝に沿って複数並ぶ



W-1溝と、それに沿うW-9・14・21溝（南東から）
W-1溝は中世から現代まで、繰り返し掘りなおされている



W-2溝（東から）



W-4溝（東から）



W-5溝（北から）



W-15溝（東から）



1号段切り状遺構北半部とW-12溝（南から）



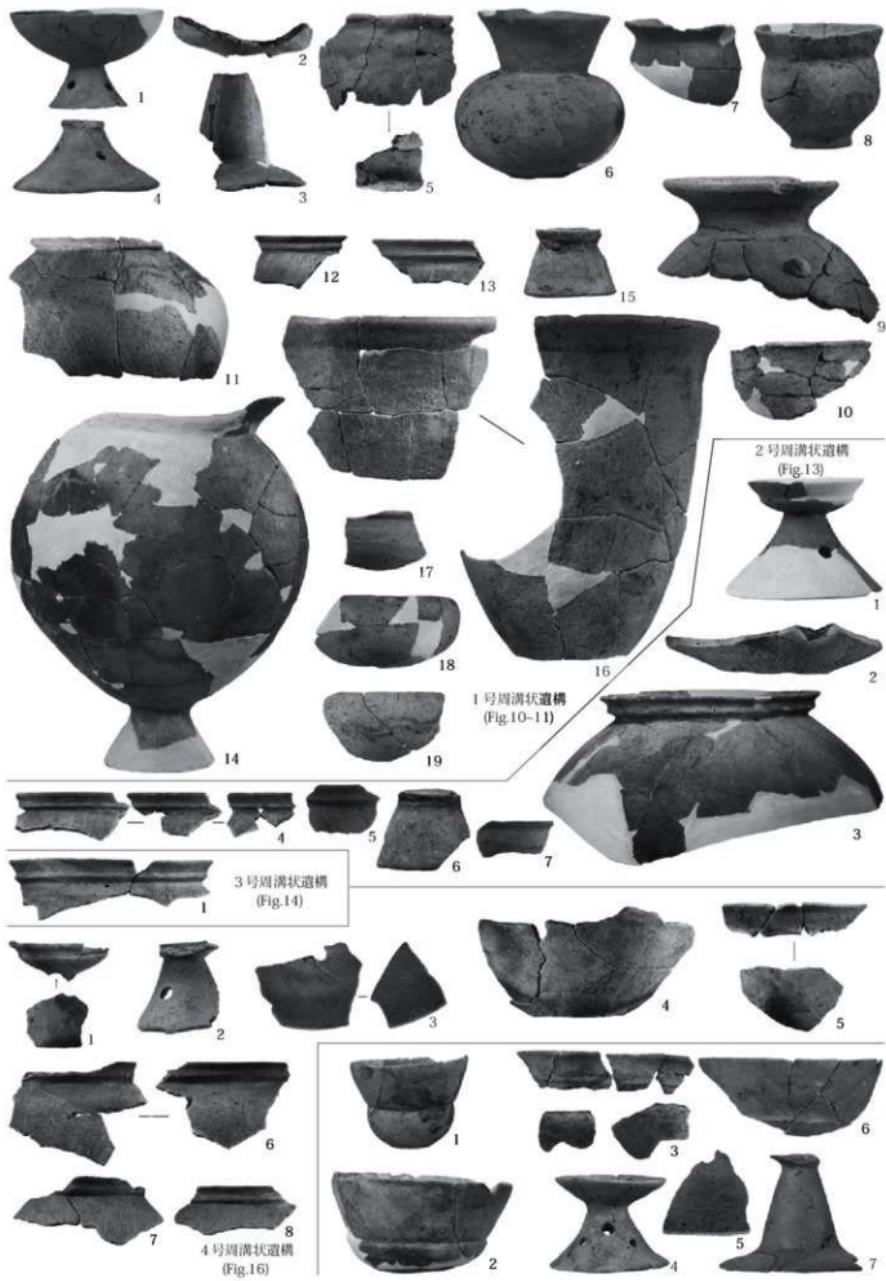
2号段切り状遺構（東から）

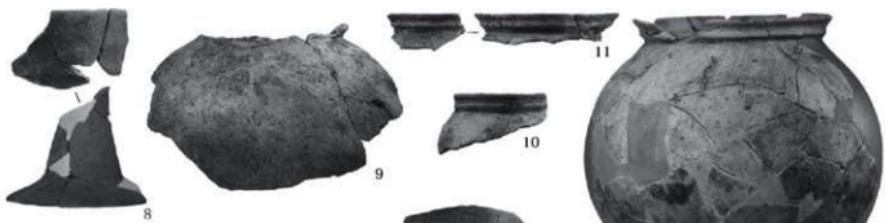


3号段切り状遺構東半部とW-20号溝（東から）



3号段切り状遺構南半部とW-12溝（南東から）





5号周溝状遺構 (Fig.18)



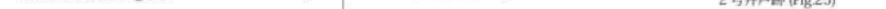
6号周溝状遺構 (Fig.21 ~ 21)



8号周溝状遺構 (Fig.22)

9号周溝状遺構 (Fig.22)

遺構外 (Fig.22)



2号井戸跡 (Fig.25)



（参考文献）※直接引用ないしは参考とした文献のみ。

赤塚次郎 1990 「V考察 1. 週間式土器」*群馬県立博物館文化財センター研究紀要* 19 群馬県立博物館文化財調査事業団

新井 仁 2001 「群馬県における平安時代の水田開発について」*研究紀要* 19 群馬県立博物館文化財調査事業団

新井 仁 2002 「西田道路・村中道路」*群馬県立博物館文化財調査事業団*ほか

有山洋介 2010 「『Vまとめ』：南部拠点地区道路群6」*毛野考古学研究所・前橋市教育委員会ほか*

有山洋介 2010 「『Vまとめ』：南部拠点地区道路群6」*毛野考古学研究所・前橋市教育委員会*

飯島義雄 1998 「古墳時代前期における「周溝をもつ建物」の意義」*群馬県立博物館紀要* 15 号 群馬県立博物館

飯島義雄 2005 「周溝をもつ建物」における振り方の認定の意義」*群馬考古学手帳* 15 群馬土器親会

岩瀬 鑑 1998 「遺物出土の例木痕について」*地神／塔頭* 群馬県立博物館文化財調査事業団

鈴方正樹 2003 「『V』の考古学」ものが語る歴史 同成社

小島敦也 2012 「古墳時代の上新田中道跡・古墳時代初期の上土」*上新田中道東道路* 群馬県立博物館文化財調査事業団ほか

坂口一 2010 「V調査の結果」*中居町一丁目道路3* 群馬県立博物館文化財調査事業団ほか

坂口一・三浦京子 1986 「奈良・平安時代の上器の編年」*群馬県史研究* 第24号

岡口功一 2012 「上毛野の古代遺跡景観」岩田書院

田口一郎ほか 1981 「元鳥名将軍城古墳：前方後円墳の外部施設確認調査」高崎市教育委員会

中里正康 2000 「『V』道路における大畠郡の測量例」*群馬考古学手帳* 10 群馬土器親会

中里正康 2007 「『V』道路 尾柄町道路 中之坊道路」玉村町教育委員会

中村信彦 2014 「V調査の成果と課題」*南部拠点地区道路群9* 技研コンサル㈱・前橋市教育委員会ほか

春山秀幸 2002 「『V』手塚川南端道路・横手湖田道路」*群馬県立博物館文化財調査事業団*ほか

前原豊・秋池正・飯島義雄 2001 「利根川からの引水道構造である「女溝」の意義」*群馬文化* 266号

文化庁文化財保護記念物 2010 「発掘調査のてびき」集落道路発掘編

前橋市教育委員会 2013 「朝倉・広瀬古墳群」群馬の古墳時代はここから始まった

前橋市理文化財調査団・山武考古学研究会 1998 「横手湖田道路・徳丸仲II道路・西善尺司II道路・下増田越渡田道路」

前橋市理文化財調査団・横手湖田道路

前橋市理文化財調査団・山武考古学研究会 2001 「亀里鉢面道路」

前橋市理文化財調査団 2004 「亀里油免II道路」

前橋市理文化財調査団 2009 「南部拠点地区道路群1」

前橋市理文化財調査団・スガ環境測定機 2009 「南部拠点地区道路群2」

前橋市理文化財調査団・スガ環境測定機 2010 「南部拠点地区道路群3」

前橋市教育委員会・技研コンサル㈱ 2010 「南部拠点地区道路群4」

前橋市教育委員会・6毛野考古学研究所 2010 「南部拠点地区道路群5」

前橋市教育委員会・御ベイシ・6毛野考古学研究所 2011 「南部拠点地区道路群6」

前橋市教育委員会・前橋市南部拠点西地区土地権利整理組合・山下工業㈱ 2014 「南部拠点地区道路群7」

前橋市教育委員会・前橋市南部拠点西地区土地権利整理組合・6毛野考古学研究所 2014 「南部拠点地区道路群8」

前橋市教育委員会・前橋市南部拠点西地区土地権利整理組合・技研コンサル㈱ 2014 「南部拠点地区道路群9」

深澤敦仁 2008 「太田地域における古墳時代前期の土器編年試案」*成蹊向山古墳群* 群馬県立博物館文化財調査事業団ほか

福田 勝 2009 「関東地方における「周溝」の研究をめぐって」*古代* 第122号 早稲田大学考古学会

若狭扶・深澤敦仁 2005 「北関東西部における古墳出現期の社会」*新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現* 新潟県考古学会

報告書抄録

ふりがな	なんぶきよてんちくいせきぐんNo.11							
書名	南部拠点地区遺跡群No.11							
副書名	前橋市南部拠点西地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
編著者名	藤坂和延 永井哲教							
編集機関	山下工業株式会社 〒371-0244 前橋市鼻毛石町207-8							
発行機関	前橋市教育委員会文化財保護課 〒371-0853 前橋市総社町3-11-4							
発行年月日	2014年9月30日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査対象面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
南部拠点地区 遺跡群No.11	群馬県前橋市亀里町 953-2, 953-3, 954- 2, 955-2, 955-6, 957-5, 958-2, 958-5	10201	25G85	36°19'55"	139°05'27"	2014.04.02 ～ 2014.05.23	11,522m ²	店舗建設
	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
			縄文時代				石器	土器は伴わない
	南部拠点地区 遺跡群No.11	集落跡 古墳時代 前期	外周溝をもつ建物9				外周溝をもつ建物と井戸からなる集落跡が、南部拠点地区遺跡群内で初めて確認された。	
井戸跡3								
溝跡7								
土坑5								
生産跡 古墳時代後期		小区画水田跡	土坑4	土師器	通常の小区域水田より区域大きい。			
		溜井状土坑1						
		溝跡3						
生産跡 奈良・平安時代		落ち込み状遺構2		土師器・須恵器	県内では最古の条里型地割に則る溝跡を検出。前後する時期の溜井状の井戸跡。			
		小穴1						
		水田跡						
生産跡 平安時代末	道路7	無		条里型水田。坪界交点と、畔を踏む道跡を検出した。				
	標石26							
	生産跡 中・近世	溝跡19						
土坑162								
段切り状遺構(水田跡)7								
掘立柱建物跡1								
権列1								
庭地状遺構6								
	馬蹄痕		陶磁器・在地土器・板碑片・ 鉄製品・銅製品・馬齒	条里型水田とは異なる、地形に沿った地割の溝跡等を検出。放牧の可能性がある馬蹄痕は、畠の場と小屋を伴う可能性がある。				

南部拠点地区遺跡群No.11

前橋市南部拠点西地区土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成26年9月22日 印刷

平成26年9月30日 発行

編集／山下工業株式会社

発行／〒371-0853 前橋市教育委員会

群馬県前橋市総社町3-11-4

TEL 027-280-6511

印刷／朝日印刷工業株式会社